

戦争と平和

(四幕三十場の劇)

原作 リエフ・トルストイ

脚色 ミハイル・ブルガーコフ

訳 能美武功

登場人物

一 語り手

二 エレーナ・ヴァスイーリエヴナ・ベズーホヴァ(エレン)

(伯爵夫人)

三 ピョートル・キリーラヴィッチ・ベズーホフ(ピエール)

(伯爵)(父称は「キリーラヴィッチ」とも)

四 アナトリー・ヴァスイーリエヴィッチ・クラギン(ア

ナトリー)(侯爵)

五 マーリヤ・ニカライエヴナ・バルコンスカヤ(マー

リヤ)(公爵令嬢)

六 アンドリエーイ・ニカライエヴィッチ・バルコンス

キイ(アンドリエーイ)(公爵)

七 ニカライー・アンドリエーイェヴィッチ・バルコンス

キイ(バルコンスキイ)(公爵)

八 ナターリヤ・イリイニシナ・ラストーヴァ(ナターシャ)

(伯爵令嬢)

九 ラストーヴァ(母親)(伯爵夫人)

一〇 ラストーフ(父親)(伯爵)(六場だけ理解を容易に

するため、「ラストーフ伯爵」としてある)

一一 ピョートル・イリイッチ・ラストーフ(ペーチャ)

(伯爵)

一二 ニカライー・イリイッチ・ラストーフ(ラストーフ)

(伯爵)

一三 ソーニヤ(ラストーフ伯爵の姪)(ソーニヤ)

一四 皇帝アレクサンドル一世(アレクサンドル)

一五 ラストープチン

一六 クトウーゾフ公爵

一七 自由主義者の船乗り

一八 元老院委員

一九 スチエパーン・スチエパーノヴィッチ・アプラークスイ

ン

二〇 いかさま賭事師

二一 グリーンカ(作家)

二二 シーンシン(モスクワの皮肉屋)

二三 イリイーン(驃騎兵士官)

二四 ヴィルチェンビエールスキイ公爵(公爵)(皇太子)

二五 シツシエルビーニン

二六 イエルマローフ

二七 ヴァリツォーゲン(副官)

二八 ライエーフスキイ

二九 カイサーロフ

三〇 クトウーゾフの副官一

三一 クトウーゾフの副官二

三二 クトウーゾフの副官三

三三 クトウーゾフの副官四

三四 医者

- 三五 蒼い顔の士官
- 三六 少佐
- 三七 マカール・アリエクスエーイエヴィツチ
- 三八 文官略服の男
- 三九 マーリヤ・ニカラーイエヴナ（子供を亡くした）
- 四〇 美人のアルメニアの女
- 四一 老人
- 四二 トーリ
- 四三 バル八ヴィチーノフ
- 四四 將軍
- 四五 ゼエニーソフ
- 四六 ドーロホフ
- 四七 エサウール
- 四八 ラストーフ家のお仕着せを着た従僕
- 四九 ラヴルシカ ニカラーイ・ラストーフの従僕
- 五〇 チホーン バルコーンスキイ家の従僕
- 五一 アルパートウイツチ
- 五二 ドウニヤーシャ バルコーンスキイ家の小間使い
- 五三 ドウローン 村長
- 五四 背の高い百姓
- 五五 百姓
- 五六 背の低い百姓
- 五七 カールプ
- 五八 丸顔の百姓
- 五九 クトウーゾフのコック
- 六〇 クトウーゾフの従卒

-
- 六一 黒い髪の下士官
 - 六二 負傷兵
 - 六三 看護兵一
 - 六四 看護兵二
 - 六五 飯盒（はんごう）を持った兵士
 - 六六 馬の調教師
 - 六七 マーヴラ・クズイミーニシュナ ラストーフ家の鍵番の女
 - 六八 ヴアスイーリイッチ ラストーフ家の執事
 - 六九 ラストーフ家の給仕
 - 七〇 ラストーフ家の召使
 - 七一 アンドリエーイの老侍僕
 - 七二 蒼い顔の士官の従卒
 - 七三 マトリョーナ・チモフェーイエヴナ
 - 七四 ラストーフ家の小間使い
 - 七五 グラスイーム バズチエーイエフ家の執事
 - 七六 バズチエーイエフ家の女料理人
 - 七七 あばたのある百姓女
 - 七八 囚人一
 - 七九 囚人二
 - 八〇 下男 およそ四十五歳
 - 八一 非常にハンサムな百姓
 - 八二 黄色い顔をした工員
 - 八三 チホーン パルチザン
 - 八四 捕虜のロシア兵
 - 八五 カラターイエフ

- 八六 赤ら顔の男（銃士）
- 八七 鼻の尖った男（銃士）
- 八八 若い銃士
- 八九 踊りの好きな男（銃士）
- 九〇 年寄りの男（銃士）
- 九一 曹長一
- 九二 曹長二
- 九三 歌の好きな男（銃士）
- 九四 疲れ果てた男（銃士）
- 九五 徴税人
- 九六 ガラヴァー（訳註 不明）
- 九七 ナポレオン
- 九八 ナポレオンの小姓
- 九九 ベルティエ元帥
- 一〇〇 レロルム・ディデーヴィリ 通訳
- 一〇一 ナポレオンの副官
- 一〇二 ランバリー（伯爵）
- 一〇三 モレーリ ランバリー（伯爵）の従卒
- 一〇四 小さな略奪兵 フランス人
- 一〇五 マントを着た掠奪兵 フランス人
- 一〇六 フランス人の槍騎兵
- 一〇七 フランス人の槍騎兵士官
- 一〇八 小さい男 フランス人
- 一〇九 ダヴー元帥
- 一一〇 ダヴー元帥の副官
- 一一一 青い軍服の兵士一 フランス人

- 一一二 青い軍服の兵士二 フランス人
- 一一三 ボス フランス軍の鼓手
- 一一四 フランスの護衛兵
- 一一五 バルコーンスキイ家に来た士官（負傷兵）
- 声一
- 声二
- 声三
- 声四
- 声五

（場 一八二二年 ロシア。）

第一幕

第一場

（ピエールの書齋。冬の夜。ピエール登場。すぐに扉が開き、サロンからエレイン登場。サロンから、低くチェンバロの音が聞こえて来る。）

エレイン ああ、ピエール。兄さんが今、どんな状態になっているのか、あなたには分らないの？

（間。）

ピエール お前達二人がいるというだけで、その場所は淫乱と悪の巣になるのだ！（扉を開けて呼ぶ。）アナトリー！

アナトリー！ 来るんだ！ お前に話がある。

エレイン Si vous permettez dans mon salon …（仏語 私、よろしければサロンに戻りますわ。）

ピエール 覚えている筈だぞお前は、あの時のことを・・・

あの時も私のことを震え上げる程怖がった筈だ。(訳註 ピエールがドーロホフと決闘をした時のことを言っている。)

(エレーン、急いで退場。)

(アナトリー登場。副官の着る軍服。片方の肩にだけ肩章あり。間。)

ピエール 貴様、結婚している癖に、ラストーフのお嬢さんに結婚すると約束して、かどわかそうとしたのか。

アナトリー ちよいとあなた、そちらがそういいう言い方をしている時に、私の方に答える義務があるとは思えませんがね。

(ピエール、アナトリーの襟首を掴まえ、首を締める。弾みで軍服の襟が引きちぎれる。)

エレーン (扉のところに現れる。)*Si vous vous...* (仏ちよつと...)

ピエール (エレーンに。物凄い形相で。)*ウー...* (エレーン、身をひき、盗み聞きする。)

ピエール (再びアナトリーの胸倉を掴む。)*義務があるとは思えないとは何だ。私が言っていることが分らないのか... 貴様。分らないのか... エエッ!... 分らないのか!... (手を放す。)*

アナトリー (襟が引き裂かれて。)*何ですか、一体... 馬鹿なことじゃありませんか... ええっ?*

ピエール 貴様は悪党だ。ろくでなしだ。ええい、貴様の頭をこれで(机から文鎮を掴み上げ。)*叩き割ってやれば、どんなにせいせいするか。ええい、何故やってしまわないんだ、この私は... あの人に結婚すると約束したのか、貴様*

は。

アナトリー いや、私は... 私はそんなことは... とにかく約束など、何もしていません。だって... 。

ピエール あの人からの手紙を持っているんだな? 今あるんだな?

(アナトリー、財布から手紙を出す。ピエール、手紙を取る。机を突き飛ばす。ソファに倒れるように坐る。アナトリー、驚く。)

ピエール *Je ne serai pas violent, ne craignez rien!* (心配するな。暴力はふるわない。)*第一は... 手紙だ。第二... 明日はもうお前はモスクワを発つ。*

アナトリー モスクワを発つ? 無理です。

ピエール 第三... お前と伯爵令嬢との間に起ったことを誰にも話してはいかん。いや、これを禁ずることは私の力で出来ることではないが、もしお前に良心のカケラでもあれば... (訳註 ここで少し落ち着く。)*君だって、よく考えれば分る筈だ。自分の満足だけがあるんじゃない。他人の幸福だって、心の平安だってあるんだ。君はその他人の幸福を自分の快樂追求のために滅茶滅茶にしている。いいか、私の女房だとか、君の姉だとか、そういう女となら、いくらぶ*

ざけたって、いちやいちやしたって構いはしない。連中は色恋にかけては君と同じように手管に長(た)けているんだ。しかし、生娘に対して、結婚すると約束したり、誘惑して攫(さら)って行くとうとするなど... 君にはそれが卑劣な行為だということが分らないのか。老人や小さな子供を殴ると同じことなんだぞ。

アナトリー 私は分りませんね。そう、私にはそんなこととは分らないし、分りたくもありません。ただ、捨てておけないことがあります。今あなたは私に向って卑劣だとか、そういう言葉を使いましたね。私は名譽ある人間・・・「オンム・ドノール」・・・として、そのような言葉はどんな人間に対してでも許す訳には行きません。・・・それは確かに、他に誰もいない二人っきりの場面で言われたには違いありませんが、それでも私は・・・

ピエール 何だ、許さないと。決闘でもしようというのか。

アナトリー 少なくとも、そういう言葉を撤回することは出来るでしょう、エエツ？ それに、そちらの要求をこの私に果して貰いたいなら、そちらに出来ることがある筈です。

ピエール ああ、撤回する。撤回するよ。それに君に謝る。それから金。道中に必要な金なら出す。

(アナトリー、ニヤリと笑つ。立ち聞きをしていたエレーン、ほつとしてその場に登場。)

ピエール ああ、なんて卑劣な、厭らしい奴等だ！

(暗転)

第二場

(モスクワのバルコンスキイ公爵家の部屋。ピエール登場。公爵令嬢マリーヤがピエールを迎える。ピエール、マリーヤの手にキス。扉の外に公爵アンドリエーイの声が聞こえる。「寵愛を失った人間に追い討ちをかけて、他人の過ちをその男になすりつけるのは簡単なことだ。しかし、私の意見ははっ

きりしている。今の治世(ちせい)で、もし何事かをやらせて立派に成し遂げられる男がいるとすれば、それはスペラーンスキイただ一人だ。)

マリーヤ(囁き声で。)「これは予期していたことだ」などと兄は申していました。誇り高いせいか、自分の感情をそのまま外に出すことを自分に許さないので。でも、私が思っていたよりも、ずっとずっと立派に兄は耐えましたわ。どうやらこうなるのは仕方ないことだったように・・・

ピエール しかしまさか、全く終ってしまったという訳では？・・・

(マリーヤ、驚いた表情でピエールを見る。(訳註「あなた、まだこの件で脈があるとも思っているのですか?」の意。(退場。)

アンドリエーイ(登場。舞台裏の誰かに言っている。)(そして彼を正當に評価するのは後世に任せるんだ・・・)(ピエールに。)ああ、ピエール、どうだ? 調子は。相変らずの肥りようだな。

ピエール やあ、それで、君の方はどうなんだ?

アンドリエーイ うん、元気だ。(間。)(君の手を酷く煩らわせたようだ。謝る。(手箱から手紙を取り出す。)(ラストーフ伯爵令嬢からの断りの手紙を受け取った。それから、噂が聞こえている。君の義理の兄が彼女に結婚を申し込んだとか、そのような噂だ。これは本當なのか。

ピエール 本當でもあり、間違ってもいる。

アンドリエーイ これは彼女の手紙と写真だ。君、彼女に会うことがあれば返して欲しい。

ピエール あれは重い病気に罹（かか）っている。

（間）

アンドリエーイ で、君の兄、クラীগン公爵はどうなんだ。

ピエール 立ち去っている。もうとつくだ。（間）彼は死ぬか生きるか、そんな状態だ。

アンドリエーイ 病気のこととは非常に可哀相だ。しかし、クラীগン氏が彼女に結婚を申し込んだのではないのか。

ピエール 彼は結婚など出来ない。もう妻がいるのだ、あいつには。

アンドリエーイ（嘲笑う。）それで今、彼は・・・君の義理の兄は・・・どこにいるんだ。もし訊いてよければ。

ピエール ペテル・・・いや、僕は知らない。

アンドリエーイ フム。まあ、それはどうでもいいことだ。とにかくラストフ伯爵令嬢に伝えて欲しい。過去もそうだったが、今でもあの人は全く自由なのだ。そして僕から呉々も宜しくと。

（間）

ピエール 訊いていいかな？ 君は我々がペテルブルグでやった議論を覚えていないか・・・例のあの・・・

アンドリエーイ 覚えている。僕は言った。墮落した女性も許してやらねばならぬと。しかし僕は、自分が許せるとは言わなかった。僕は許せないのだ。

ピエール それが今度の話と比較になるだろうか。

アンドリエーイ 比較になる。同じだ。再び辞を低くして彼女に結婚を申し込む、そしてその他もろもろ、心の広いと

ころを示す。確かに立派なことだ。しかし、僕には出来ない。あの話に出てきた男の真似は・・・もし君が僕の友人でいたいなら、もう彼女のこと・・・いや、これに関するどんなことも、二度と話さないでくれ。じゃ、失敬。あれは渡してくれるな？

（ピエール退場）

アンドリエーイ（一人になって。）クラীগン・・・あんな奴と決闘するほど、この自分を卑しめる訳にはいかない。そんなにまで自分を低めるなど・・・しかし、奴に挑まずにどうしていられよう。腹の減った人間は食い物に飛びつく以外にはない。何ていう、何ていうことだ。人は何と思うか。馬鹿馬鹿しい・・・ああ、こんなにも取るに足らないことが人間の不幸の原因になり得るとは！・・・

（扉、静かに開く。公爵令嬢マリーヤ登場）

マリーヤ お兄様、お兄様は御自分の幸せを打ち壊した人のことを考えていらっしゃるのね。私、たった一つだけお兄様にお願ひがあるわ。人間の不幸を作るのは人間じゃないわ。神様よ。人間は神様の思し召しのまま。お兄様を不幸にした人がいたとしたら、それも神様のせい。その人のことは許して、忘れてあげなくちゃ。私達、人を罰する権利はないわ。お兄様だって、人を許す幸せのことは御存知でしょう！

アンドリエーイ（嘲笑う。）お前は、この私に許せというのか。そいつを説得するには、私を痛めつけなければ駄目だろうね。相当痛めつけなければ。

（暗転）

第三場

(ラストーフ伯爵家の居間。窓からくつきりと彗星(ほうき星)が見える。ピエール一人。そこにナターシャ登場。)

ナターシャ ピョートル・キリールイッチ、(訳註 ピエールのロシア語名。)バルコンスキイ公爵は、あなたのお友達でしたわ。……いえ、今でもお友達ですわ。あの時、何かの時には、あなたに御相談しろと。……あの方今、この地にいらっしやいます。どうか、どうかあの方に、私を許して……許して下さいるように……

ピエール ええ、言います、彼に……しかし……

ナターシャ ああ、私には分っています。もうすべては終わったのですね。私、あの方にいけない事をしてしまいました。その事で私、苦しんでいます。どうかあの方に伝え下さい。私がかから悔いていると。ただひたすらお許しを戴きたいと。

ピエール お伝えします、すべてを。しかしどうか、次のことを、一つだけ、心に留めておいて戴きたいのです。私があなたの友人だということ。そして、何かあなたに助力でも忠告でも、ただ単に何か心の中を打ち明けたいとお思いの時でも……今でなくて、気がもつと落ち着いた時……私のことを思い出して下さい。(ナターシャの手を接吻する。)

私は幸せです、もしそのような時が来れば……

ナターシャ そんな風に仰らないで。私、それに値しませんわ。(出て行くこととする。)

ピエール(手を取ってそれを押し止めて。)(待つて、どうぞ待つて下さい。これからののですよ、あなたの人生は。

ナターシャ これから? いいえ! これからはありません

ん。これで終なのです、私の人生は。

ピエール もし私が、今のこの私でなかったら、もっと美男子で、もっと賢くて、もっと良い人間だったら、そしてもし妻帯していなかったら、今この場で私は、膝まづいて、あなたの手を、あなたの愛を乞うことでしょう。(ナターシャ、泣きながら退場。)

ピエール ああ、どこへ……今からどこへ行こう。クラブへ?……誰かの家によばれに?……とんでもない。ああ、あの人の、あの目……あの、僕を見て感謝を表したあの目……あの目に比べたら、どこのどの家に行っただって、貧弱で哀れなものにしか見えやしない。(窓の傍による。)

彗星だ! 彗星だ! あれは彗星だ!(退場。)

語り手(ラストーフ家に登場。)(星の鏤(ちりば)められた黒い空の巨大な空間が、ピエールの目の前に拡がっていた。その空のほぼ真中あたり、プレチースチェンスキイ通りの上方に、沢山の星に混じっているながら、その地球からの距離の近さから、その光の白さから、またそのピンと上についた尻尾のせいから、一際(ひとときわ)目立つ一八二二年の巨大な明るい彗星があった。この星こそ、当時、この世界の大災害、或は世界の終りを予言すると噂された、あの彗星であった。しかしピエールには、長い煌(きら)めく尾を持つこの明るい星は、何の恐怖の感情も呼び起こさなかった。それどころかピエールは、喜ばしそくに、涙で濡れた目で、この明るい星を眺め続けた。この明るい星、それは、もの凄い速度で、無限の空間を放物線を描いて飛んで来て、突然、まるで飛んでいた矢が地上に突き刺さって止る時のように、暗い空の中

の、自分で選んだある一点にぐさりと入り、ピンと高く尻尾を上げて止ったかのようだった。

ピエールには思われた。この星は、今僕の心の中にあるものと完全に呼応している。この、解きほぐされて柔らかくなり、元気づけられた心、そして、これからは全く違った人生を送るんだという決意でいるこの心と。

(暗転)

第四場

(暗闇から教会の合唱が聞こえる。)

語り手 一八二二年に、西ヨーロッパの勢力はロシアの国境を越え、戦争が始まった。これは人間の理性、そして人間のあらゆる天性に反する事件であった。何百万という人間が、お互いがお互いに対して、悪業の限りを尽したのだ。詐欺、裏切り、窃盗、贋金の製造・発行、強盗、放火、そして殺人を。その数たるや、全世界の裁判記録全てを集めてもまだ追いつかないほどのものであった。しかしこれら悪業を犯した当時の人々は、誰一人これが犯罪であると認識してはいなかったのだ。

(ラズモーフスキイ家の教会。群衆が十字を切っている。)

声一 陛下御自身が軍隊をお連れになって、モスクワに到着されたそうだ。

声二 噂では、スマリエーンスクも占領されたそうだ。

声三 ああ神様、ロシアを救うものはもう奇跡だけしかないのですか。

(ナターシャ、老伯爵夫人、お仕着せを着た下男、登場。)

声一 あ、ラストーフのお嬢さんだ……クラークンと噂のあった……

声二 なんてお瘦せになって……でも、相変らずお綺麗な……

(舞台裏で、声四「神よ、我々に心の安らぎを……」)

ナターシャ 誰にも皆平等に、心の安らぎを。階級の差別なく、敵味方の別なく、親しく結ばれた兄弟の愛のように……

(コーラス、舞台裏で声四「おお、あてどなく彷徨(さまよ)い、漂(ただよ)える者に、心の安らぎを……」)

ナターシャ ああ、漂える者……あれは公爵アンドリエー

イ様のこと。私があの方に犯してしまった過ちを、神様、どうかお許し下さい。

(コーラス、声四「おお、我々を憎む者、そして我々の敵達にも、心の安らぎを」)

ナターシャ 敵って誰かしら。そう、私に悪いことをしたアナトリーだわ。でも喜んであの人も祈ろう。敵として、心の安らぎを。

(コーラス、声四「この私、そしてこの私の命を、神、イエス・キリストは与えたまう……」)

ナターシャ ああ、神様。私自身も、私の命も、あなたの意のままです。私は何も欲しくくない。私は何も望まない。どうか教えて、私が何をすればよいのか。私を連れ去って、どうか私を連れて行って!

伯爵夫人 まあ何てことを。神様、どうぞ娘をお救い下さい!

(突然静かになる。全員膝まづく。)

(舞台裏で、声五「おお神よ、我々の救い主、神よ、我らを許し、心に安らぎを与えたまえ。かの敵は、あなた様のこの土地に脅威を与え、我らに襲いかかり、あなた様の財産を滅ぼし、あなた様の愛するこのロシアを廃虚にせんとしております。おお、偉大なる神よ、あなた様に敬虔に仕える我らが君主、アレクサンドル・パーヴロヴィツチに、絶大なる力をお授け下さい。我らの敵に大いなる一撃を加え、あなた様の忠実な僕(しもべ)我らが足下に、敵を粉碎して下さいますように。もしあなた様がこの助力、そして敵への勝利をお与え下さいますならば、子々孫々、また、現在はもとより何世紀も何世紀も、永遠の将来にわたり、感謝を捧げるものでございます。」)

コーラス アーメン!

(群衆、教会の奥へと退場。)

ナターシャ(一人になり。)
ああ、私は敵が粉碎されるようにと祈ることが出来ない。ほんの少し前、私、みんなと一緒にそれを祈ったけれど・・・ああ、何て恐ろしい事、人々が罪を罰せられるのを見なければならぬ。あれはみんな私の罪のせい! ああ、神様、どうかみんなをお許し下さい。そして心の安らぎと幸せを! 神様、この私の願いをお聴き届け下さい!
(コーラスがカンタータ「おお神よ、祈る我らが願いをお聴き下さい」を大きな声で歌つ。)

第五場

(暗闇の中でコーラスが静かになる。)

語り手(登場。)
ピエールがラストフ家を訪問し、そのあとナターシャの感謝の眼差を思い出しながら、空にかかった彗星を見、何か自分に新しい人生が開けて来たと感じたあの日から、ピエールの心の中に、それまで長い間蟠(わだかま)っていた現世の空しさ、無意味さの問題は存在しなくなっていました。その問題とは、「何故」「何のために」という恐ろしい問題だったのだが、それが今や、新しい別の問題が生じたためもなく、また最初の問に対する解答が得られた訳でもなく、ただ彼女の登場がそれに取って代わってしまった。従って今ではピエールにとつて誰かが国家や皇帝をのっとしてしまおうが、国家や皇帝が誰かに感謝の意を表しようが、まるで問題ではなかった。ただ「彼女は昨日、僕にニコリ笑って、どうぞまたいらして下さいと言った」・・・それだけが大事だったのだ。そして自分が彼女を愛しており、それを誰にも知られてはいけない、という事だけが(大事だったのだ)。

(コーラスは次第に小さくなり、ナターシャの歌声に取って代わって行く。)

ナターシャ

「あの娘(こ)は金色の豎琴を抱えて、

彷徨(さまよ)い歩きながら、かき鳴らす

熱情的な、心に適(かな)った旋律を。

お前を自分の方に引き寄せようと・・・」

場は、ラストフ家の居間。ナターシャが歌っている。ピエール、扉を開けて登場。

ナターシャ 私、また歌の練習をしようと思って・・・だっ

て、歌は私の仕事ですもの。

ピエール そう。いいことです。

ナターシャ いらして下さって私、本当に嬉しいですね。

この頃私、とても幸せなんです。兄がゲオルギー勲章を受けたの、御存知でしたかしら？ 兄のために私、とても喜んでいきますの。(間) あら私、歌を歌ったりして・・・いけなかったのですわね？

ピエール いいえ。何故そんな・・・歌った方がよっぽどいいです。何故そんなことを私にお訊きに？

ナターシャ 私、自分でも分りませんの。私、出来ることなら、お気に召さないことは何一つしないようにしたいって・・・私、心から御信頼申し上げておりますの。今までにどんなに大切なことをして下さったことが、そしてどんなに沢山のことを・・・(間) 囁き声で) ああ、バルコンスキイ・・・あの人またロシアに帰って来て、今度は狙撃兵隊の隊長を勤めていらつしやる。(間) どうなのでしょう、あの方いつかは私を許して下さいませんか。私に対する悪い感情が薄れて行くことがあるのでしょうか。

ピエール 僕の考えでは・・・彼があなたの何を許すっていうんでしょう・・・もし僕が彼の立場にいたとしたら・・・

ナターシャ ええ、ええ、あなただつたら・・・あなたでしたら・・・話は違いますわ。あなたほど心の寛(ひろ)い、優しい、いい方なんて、私、知りませんわ。それに、そんな人いる筈がありません。もしあの時あなたがいらつしやらなかったら、それに今だって・・・私、自分がどうなっていたか・・・だって・・・(泣き出す。それから、もぐもぐと何

か言う。そして退場)

(ピエール、一人残る。考える。静かに扉が開き、ペーチャ登場。)

ペーチャ ピョートル・キリルイッチ・・・
(ピエール、気づかず、返事なし。)

ペーチャ ピョートル・キリルイッチ・・・
ピエール あ・・・何？

ペーチャ ピョートル・キリルイッチ、お願いです。僕のこと、問い合わせて下さいました？ 僕の驃騎兵隊入りを。あなたが最後の頼みの綱なんです。

ピエール ああ、そうだ。君のことね。驃騎兵？ 分つた。言う、言う。すぐに知らせるよ。

伯爵(登場して。) ああ、どうだね？ 君、詔勅は手に入れたかね？

ピエール ええ、手に入れました。明日陛下がおいでになる予定です。・・・兵隊の徴集は実にうまく行つたんだそうですね。千人の中から十人の割合だとか。おめでとございませう。

伯爵 そうそう、有難いことにね。それで、君の隊は？
ピエール また足止めのようにです。スモレンスキイまで行つたところで。

伯爵 そうかそうか。やれやれ・・・それで、詔勅は？
ピエール 詔勅の概文(げきぶん)ですね・・・ここに。

(ポケットを叩く。)

(伯爵夫人登場。)
ピエール(伯爵夫人の手にキス。) Ma parole, je ne sais plus

ou je l'ai fourré. (参つたな、これは、またどこかへ行つてしまつた。)

(ナターシャ登場。)

ピエール これはいかん。戻つて取つて来なくちゃ。家に忘れたい。これはどうしても。 . . . あ、そうだ。馭者をもつ返してしまつたぞ . . .

(舞台裏でソーニヤの声「紙はここにありましたわ。帽子の裏地の中に . . .」。ソーニヤ登場。)

伯爵 ああソーニヤ、お前は物捜しの名人だね。

(ソーニヤ、詔勅を拡げる。)

(シーンシン登場。挨拶をする。)

伯爵 やあ、モンシエール (仏 「親愛なる君」)、どうかな? 徴兵の様子は。

シーンシン ラストープチン伯爵のところに、ドイツの若いのを連れて来たのです。それで、「有望な若いキノコ」と言つつもりで、よせばいいのにフランス語で、「これは若いシャンピニオンです」と言つたのです。伯爵は即座に「失格だ」と言いました。「こんなのが何故シャンピニオンだ。ただのドイツの老いばれキノコじゃないか」と。

伯爵 もういい。分つた。私は妻にもよく言つてある。フランス語を喋るのは極力避けるようにとな。今はそんな時期じゃないんだ。

シーンシン ところで聞きになりましたか? ガリーツイ

ン公爵はロシア語の家庭教師をおつけになつたのです。ロシア語を習つていらつしゃぬのぢや。 Il commence a devenir dangereux de parler français dans les rues! (街でフランス語を話

すのは危険になつてきているのです。)

伯爵 (ピエールの方を向き。) 今のような具合なんですよ、ピョートル・キリールイッチ。義勇兵はどうやって集めたものですか? そう、あなたもここはひとつ . . .

ピエール (考えながら。) ええ、ええ、戦争に行かなければ . . . いや! 私は駄目だ。こんな身体ではとても。それにしても、ひどく奇妙な具合になつて来たものです。ええ、私にはとても理解出来ない . . . 私が兵士に . . . いや、分りません。兵役の経験からはひどく離れてしまつて . . . もう何年も経つていて . . . いや、しかし、今の時代、誰もその責任を免ぜられるものではなし . . .

伯爵 さあ、ソーニヤ、それを . . .

ソーニヤ (詔勅を読む。) 「われらが旧都モスクワに告ぐ。敵は大軍をもつてロシア国境に侵入せり。わが愛する祖国を破滅せんとして進軍中なり。余はすみやかに旧都及び、その他の諸地に (住める人民のうち) 赴き、わが義勇軍の指揮並びに諸般の協議を行はんとするものなり。わが義勇軍は、目下敵の進軍を阻みつつあり。また、敵がどこに現れやうとも直ちにこれを撃破せんと、さらに義勇軍が組織されつつある。願はくは、敵がわが国を陥 (おとし) れんとする滅亡が、彼ら自らの頭上に転ぜんことを。また、囚われの身より解き放たれたヨーロッパが、我がロシアの名を賛美するに到らんことを。」

伯爵 その通りだ。陛下が一言言えば、我々は何物をも犠牲にする。惜しむものなど何も無いのだ。

ナターシャ パパ、素敵だわ。 (父親にキスする。)

シーンシン これはこれは、愛国の少女。

ナターシャ 愛国の少女だなんて！ 違っね。私ただ．．．あなたにかかったら、何でも冗談になっちゃうんだから。でも、これは冗談事じゃないの。

伯爵 そう、冗談などではないぞ。陛下が一言仰せになれば、我々は全員行く．．．ドイツ人などとは違うんだ、我々は。

ピエール お気づきでしたか？ 詔勅の中に「諸般の協議」

という言葉がありましたか？

伯爵 なあに、深い意味などありません。

(扉が開き、ペーチャ、重々しく登場。)

ペーチャ パパ、よく聞いて。ママも．．．僕はもう決めたんだ。パパもママも僕を家から出して、兵役につけなきゃいけないんだ。だって僕はもう．．．そう、これだけだ、言うことは。

伯爵夫人 (驚いて、両手を軽く打って。) まあ、この子は何てことを言いだすんでしょう。

伯爵 おいおい、また立派な兵隊さんが一人か。馬鹿なことを言うのは止める。まづは勉強だ。

ペーチャ 馬鹿なことじゃないよ、パパ。フエージャは僕より年下なんだ。それでも行くんだ。大事なことは、こんな時にはどうせ勉強だって出来はしないってことなんだ．．．我が祖国が、こんな危機に立っている時には．．．

伯爵 沢山だ。もう沢山。馬鹿なことだ。

ペーチャ だって、さつきもパパ、言っただばかりじゃないか。何物をも犠牲にするって。

伯爵 ペーチャ！ いいかペーチャ、黙るんだ！

(心配のあまり伯爵夫人退場。その後からソーニャも退場。)
ペーチャ ほらここに、ピョートル・キリーロヴィッチが．．．この人も言ったださってるんだ．．．

伯爵 ペーチャ！ 馬鹿を言っな。お前はまだ乳離れもしていないんだ。それが兵役だと！ 言うことを聞くんだ！ (ピエールとシーンシンに。) さ、あちらに。煙草にしましう。

ピエール いえ、僕は．．．家に帰らなければ．．．仕事があつて．．．

伯爵 そうですか。それではこれで失礼を．．． (ペーチャから逃げるようにシーンシンを連れだつて退場。)

ペーチャ フエージャは行くんだ．．．祖国が危機存亡の時なのに．．．フエージャだつて行くのに．．． (泣き出しながら退場。)

ナターシャ 何故お帰りになるの？ 何か気を悪くなさつて？ 何故ですか？

語り手 「何故なら、僕はあなたを愛しているからです」．．．ピエールは言いたかった。しかし、言わなかった。涙がこぼれそうになり、ピエールは下を向いた。

ピエール 何故なら、こちらには、もうあまりお邪魔しない方がいいのです．．．何故なら．．．ええ、仕事がありませんので．．．

ナターシャ 何故？ 仰つて．．．何故？．．．

(ピエール、黙つてナターシャの手にキス。そして退場。)

第六場

(スラボーツキイ宮殿。制服を着た貴族達が大勢ひしめいて
いる。)

自由主義の退役海軍將校　スマリエーンスクの人々は、皇帝陛下に義勇軍を出したそうだ。しかし諸君、果してこれが、我々の良き手本になるであろうか。我々モスクワの貴族が、真に必要と感じるならば、皇帝陛下に我らの献身を示すこれとは別の方法があるのではないだろうか。諸君はまさか、一八〇七年の、あの義勇軍募集のことを忘れてはいまい。あれはただ、坊主と強盗どもの懐(ふところ)を肥やしてやっただけではないか。それに、あの義勇軍が一体祖国の何の役に立ったというのだ。何一つ役には立たなかった。ただこの国の経済を滅茶滅茶にただけだったではないか。義勇軍はもう止めだ！ 徴兵だ！ 徴兵にすべきなのだ。一旦義勇軍として出て行って、そいつらが帰って来る時には、何になつてゐるか。兵隊でもない、百姓でもない。ただのヤクザ者として帰って来るのだ！ 我々貴族は、自分の命など惜しみはしない。我々全員出て行く。いや我々が行くばかりではないぞ。新兵だつて取つて来て見せる。ただ陛下が一言そう仰せになればいいのだ！ 我々全員、陛下のために死んでみせるぞ！

元老院議員(齒が抜けているため、口をモグモグさせながら。)
私の考えはです、皆さん、私の考えは、ここに私達が招集されたのは、決して今現在、義勇軍を募(つのる)のか徴兵にすべきかを議論するためではないということなのであります。私達は陛下の呼び掛けに応じてここにやつて来た。決して徴兵か義勇兵募集かを判断するために集まったのでは

ない！ そのようなことはもつと上部の会議で決定されるべきことなのであります！

ピエール　どなたか名前は存じ上げませんが、私は今の方の御意見に反対です。私は徴兵か義勇兵か、というような問題を決める前に、まづ陛下に、現在の兵員の数、及びその状況についてお訊きし、正確な情報を得るべきだと考えます。その上で・・・

スチエパン・スチエパーノヴィッチ・アプラークシン(制服を着ている。)
まづ第一にですな、私は言いたい。そんなことを陛下に訊く権利が我々にあると思つてゐるのですか。第二にですな、たとえ我々ロシア貴族にそのようなことを訊く権利があつたとして、陛下に何の答が出来るといふのです。軍隊は敵の動きに合わせてあつちへ派遣されたり、こつちに動かされたり・・・そんな数が掴める訳がない・・・

いかさまランプの博打打ち(訳註　この男も制服を着て、さも一流の人物であるかのように喋る。)
そうだそうだ。もう議論なんかしている時じゃない。自分の身を行動に移す時だ。ロシアは戦争をしているんだ。敵がやつて来ているんだ。このロシアをぶつ潰すために、我ら祖先の墓を冒瀆するために、妻を、子供を攫(さら)つて行こうとして！ 我らロシアの信念、王位、そしてこの祖国を守るために、最後の血の一滴まで惜しむようなロシア人が一体どこにいる！ くだらん議論は止めだ！ 目にも物を見せてくれるぞ。ロシアがロシアのために立上るんだ！

(「そうだ、そうだ、その通りだ！」の叫び声。)

ピエール　今の方は私の意見に反対のようですが・・・

グリーンカ（訳註 「ロシア新報」の編集者。口を開くとあたりから「編集長、編集長」と声がかかる。）毒には毒をもって制せねばならん。かつて私は、稲妻が光り、雷鳴が轟く中を、ある子供がそれをニコニコと眺めていたのを見たことがある。しかし我々は、雷鳴、稲妻には抗さねばならん。この子供の真似をしてはいかんのだ！

アプラークスイン そうだそつだ。雷鳴の轟く中で・・・伯爵 その通り！

いかさま師 雷鳴の轟く中でニコニコは出来ん！

ピエール 私はただ、現状を正確に知つてと・・・

アプラークスイン モスクワが生贄（いけにえ）になるうという事態なんだぞ！

グリーンカ そんな時に何だ。あの男は人民の敵だ！

ピエール 説明させて欲しい、私に！

アプラークスイン 人民の敵！

ピエール 皆さん・・・押さないで！ 何をする・・・

（突然シーンとなる。訳註 モスクワ総統ラストプチンが登場したため。）

ラストプチン 陛下が今すぐ来られる。私の考えは、現在のこの状況では、多くを議論しても始まらぬ。陛下はかしこくも、我々貴族及び商人をここに招集なさつた。（訳註 商人達のいる部屋を指さして。）あそこからは、何百万という金が供出されることになる。我ら貴族の役割は、義勇兵を出すことだ。我が身を惜しんでいる時ではない。これが我々のなすべき最小限の御奉公だ・・・（歩き廻る。）

（訳註 このあとはシーンとした中で議論が進められる。坐つ

ている人物達のみがポツリポツリと発言する。）

元老院委員 スマリエーンスクに倣（なら）い、こちらでも千人の農奴につき十人の義勇兵を出し、この十人に、軍服の支給を行うべきだと考えますが・・・

アプラークスイン 私もそれに賛成です。

いかさまトランプ賭博師 賛成。

声（複数） 賛成・・・賛成・・・

声 陛下だ・・・陛下だ・・・

（シーンとなる。）

アリエクサーンドル（登場して。）紳士諸君・・・祖国は今、危機に瀕（ひん）している。モスクワの貴族諸氏にかけ余の期待は・・・

アプラークスイン 陛下！ 陛下！ 只今我々は決議を行つ

たばかりのところでありませぬ。我々は千人の農奴につき十人の義勇兵、それに軍服の支給を決めました。

アリエクサーンドル 諸君、余はロシア貴族諸氏の熱意を疑つたことは一度もない。しかし今日のこの決議は、余の期待を大きく越えるものである。余は祖国を代表し、心からの感謝を述べる。諸君、すぐに行動に移ろう。時を無駄にすることは出来ぬ！

（叫び声「皇帝陛下万歳！」「皇帝万歳！」アリエクサーンドル、次の間に退場。）

伯爵 そつだ、陛下のお言葉・・・それが一番大事なのだ。

（会場の騒然としたどよめき。）

アプラークスイン マーモノフ伯爵は一連隊御寄付なさつ

た！

(商人達のいる部屋から、叫び声がかかるのが聞こえる。その部屋からアリエクサーンドル皇帝、泣きながら登場。その傍にラストーフチン、肥った仲買人、組合長の三人がつきそって登場。)

仲買人(泣きながら。)命も財産もみんな捧げます、陛下！(全員、去って行くアレクサーンドル皇帝の方へ押し寄せる。)

ピエール(ラストーフチンに。)私は千人の義勇兵、そしてそれにかかる費用一切を寄付します！

ラストーフ伯爵(一人残って、泣きながら。)何よりも大事なのだ・・・陛下の言葉が。

(扉が開き、ペーチャ登場。襟は汚れ、外套はちぎれ、真つ蒼な顔。両手にビスケットを握っている。)

ラストーフ伯爵(ペーチャを見て、驚いて両手を打ちあわせる。)これは一体・・・お前はどこから・・・

ペーチャ 僕はクレムリン宮殿にいたんだ・・・陛下に直接お会いしようと・・・どうして、どうして若かったら、

お国のために身を捧げられないっていうんですか！って・・・でもパパ、僕、人波に押されて・・・倒れて・・・のしかか

られて・・・肋骨をひどく押されて・・・目の前が真つ暗になつて・・・

ラストーフ伯爵 そうだ、そのまま押し潰されて、死んでしまう事もあるんだぞ。お前、まるで布のような、真つ蒼な顔をして・・・(物を問うようにペーチャの握っているビス

ケットを見る。)

ペーチャ 陛下が・・・陛下がバルコニーから投げてくださいだ・・・ビスケットをばらまいてくれたんだ・・・

(間。)

ペーチャ 僕・・・僕、決心した・・・しつかりと決めたんだ・・・僕を許さないなら、僕・・・家出する。(十字を切りながら。)家出するんだ！

ラストーフ伯爵 分った。私が行く・・・私が自分で・・・お前の義勇兵志願を出して来る・・・

(暗転) (第一幕 終)

第二幕

第七場

(丘。すぐに雷雨が来そうな空。)

(丘の上。ナポレオンが折畳み式のストールに坐っている。片方の足は太鼓の上。その前に、微動もせず小姓が膝まづい

ている。ナポレオン、片方の肩に望遠鏡を載せて、遠くを眺めて¹⁵いる。非常に遠くから、微かに楽隊の音が聞こえる。

(丘の下に軍隊が行進している。)そして時々、何千という兵隊の、「皇帝万歳」という叫び声が聞こえてくる。)

(丘の上には左記の二名だけ。)

(ベルチエ元帥、丘を上って登場。)

ナポレオン(望遠鏡を下ろして。)En bien? (どうした。)

ベルチエ Un cosaque de Platow... (プラトーフ隊のコサック兵が・・・)

語り手 プラトーフ隊のコサック兵を一人掴まえました。その男の話によると、プラトーフ隊は、本隊に合流する予定とのこと。また、クトゥーゾフが総司令官に任命されたとのこと

ベルチエ *Tres intelligent et bavard* (その捕虜はなかなか頭がよく、お喋りであります。)

語り手 ナポレオンはその捕虜を連れて来るように命じた。(ベルチエ退場。)

語り手 捕虜の名前はラヴル・シユカ。ニカライ・ラス・トフの従卒であった。彼はその前の日、ぐでんぐでんに酔っ払い、主人のニカライに食事を出すのを忘れたため、散々に鞭打たれる。そして鶏を捜して来いと言われ、村に来たのだが、そこで掠奪をほいままにしているうちに、フランス軍に捕まったのである。ラヴル・シユカは海千山千の、粗野で恥知らずの従卒であった。何事をするにも卑劣とずる賢さをそこに加えて行動することを義務と考え、自分の主人の歡心を買つたためなら何でもしようと思つていた。主人の下劣な意図をいつでも鋭く見抜いていたが、特に虚栄心或は瑣末なことだから来るものは決して見逃さなかつた。ナポレオンの陣屋に引きだされた時ラヴル・シユカは、簡単に、そしてはつきりと、この人物がナポレオンであると見抜いた。しかし、全く臆するところはなかつた。彼の関心事はただ一つ、いかにしてこの新しい主人に気に入られるか、であつた。(丘にベルチエ、レロルム・ディデーヴィリとラヴル・シユカが登つて来る。)

ナポレオン(訛りのあるロシア語で。)お前はコサツクか。ラヴル・シユカ コサツクです、旦那様。

語り手 ナポレオンはラヴル・シユカに訊いた。ロシア人達はどう考えているのだ。自分達がボナパルトに勝てると思つているのか、と。

(ナポレオン、通訳(レロルム)に手で合図する。)

レロルム・ディデーヴィリ(訛りのあるロシア語で。)お前・・・お前は・・・どう考えている・・・若いコサツク・・・

ロシアがボナパルトに勝つか・・・それとも、負けるか。

ラヴル・シユカ(問の後。)つまりその・・・戦闘がすぐ開始されるのであれば、まもなくして、フランス側が勝つでしょう。これは確かです。しかし、もし、三日経つて、つまり、三日後に戦闘が開始されるのなら、それは長引きます。

レロルム・ディデーヴィリ *Si la bataille est donnee avant trois jours, les Français la gagneraient, mais que si elle serait donnee plus tard, Dieu sait ce qui en arriverait.* (三日のうちに戦闘が開始されればフランス側の勝利となるでしょう。しかし、それ以後の開始の場合は、その結果は神のみぞ知る、です。)

語り手 ナポレオンは、通訳に命じて、ラヴル・シユカに、最後の言葉を繰り返させる。

レロルム・ディデーヴィリ(ラヴル・シユカに。)最後のところをもう一度言つてみよ。

語り手 ラヴル・シユカはナポレオンを喜ばせるために、彼の正体が分つていないふりをする。

ラヴル・シユカ 戦闘は長引きます、旦那様・・・そちらにはボナパルトという偉い人がいて、世界を征服してきたそうです、まあ、ロシアとなると話は別ですから・・・

語り手 通訳はこの最後の言葉は省略して、ナポレオンに通訳する。ボナパルトは微笑む。

ベルチエ(レロルム・ディデーヴィリに。) *Le jeune Cosaque fit sourire son puissnat interlocuteur.* (この若いコサツク

め、偉大な話相手の顔を綻（ほころ）ばせたじゃないか。）

レロルム・ディデーヴィリ Oui. (そうですね。)

語り手 ナポレオンは言った。「ドン生まれのこのコサック・・・「セツタンファン・デュ・ドン」・・・に、余の正体を明かしてやったら、さぞかし面白がるう。・・・余、即ち、「連戦連勝向こうところ敵なし」と、ピラミッドに書き記した、フランスの皇帝ナポレオン・ボナパルトその人であるとな。

レロルム・ディデーヴィリ(ラヴルーシュカに。)
コサックよ、このお方こそ、ピラミッドに不朽（ふきゆう）の文字を書かれた、皇帝ナポレオンそのお方であるぞ。

語り手 ラヴルーシュカは、この新しい御主人を喜ばせようと、その言葉を聞くや、すぐに今までの自分の言葉に恥じ入り、びっくり仰天したふりをした。この顔は、彼が悪事を働き、鞭打ちの刑で主人の前に引つ立てられる時にいつでもする表情で、彼にとっては慣れたものだったのだ。ナポレオンは「彼に褒美を取らせろ」と、そして、「捕えた小鳥を、その生まれた野原に返してやれ。この男に自由を与えろ」と命じた。

ナポレオン … donner la liberte a un oiseau qu'on rend aux champs, qui l'ont vu naitre!

(ベルチエ、ラヴルーシュカに金を与える。)

ラヴルーシュカ 有難うございます、陛下。

レロルム・ディデーヴィリ 陛下はお前に自由を与えて下さるぞ。小鳥を、生まれた野原に返すように！

(雷雨が来そうな暗さ。雷鳴が轟く。ナポレオン、ベルチエ、

レロルム・ディデーヴィリと小姓、レインコートを着て、丘を下る。)

ラヴルーシュカ(一人残つて。) アンファン・デュ・ドン！

(暗転)

第八場

(夏。バルコーンスキイ公爵の屋敷。柱のあるテラス。テラスの上、肘掛け椅子に、半分肌脱ぎになって、公爵ニカライ・アンドリエーイェヴィツチ・バルコーンスキイが坐っている。)

バルコーンスキイ(苦しそうに。) よーし、やっとこれで終つた。少し休むぞ。全く何て辛いんだ。こんな仕事はさつさと片付けて、私を早く解放してくれ！(間。) 落ち着いて休むことなど出来はせん。酷い話だ！ そうだ、そう言えば何か大事なことがあつたな。何か一つ、大事なことをやり残してあつた・・・門(かんぬき)を下ろせ、だつたかな？ いや、あれはもう言つた。そうだ、客間に置いてあつた何かだ。マリーヤが何か持つて来たんだぞ。デサリー・・・あの馬鹿めが何か言つていたな。鞆とか何か・・・よく思い出せない・・・(呼ぶ。) チーシカ！(また自分に。) 食事の時に何か話をしていたぞ。何だつたんだ。

チホーン(登場して。) ミハイール公爵様のごとで・・・

バルコーンスキイ 黙れ！ 黙れ！(間。) そうだ、分つ

たぞ。マリーヤが読んだ・・・デサリーが何かヴィーテブスクについて話おつた・・・ニエマン河からこつちに敵が侵入して来ることなどあり得ん。雪解けの時期にポーランドの

沼で溺れ死にするんだからな……（心配になる。小さいテールの中を捜し、手紙を見つめる。読む。顔色が変わる。理解し始める。）何だつて？……フランス軍がヴィーテブスクまで来た？ 四日すればスマリエーンスクまで侵入するかもしれん、だと？……すると、今はもうスマリエーンスクまで？ チーシカ！ チーシカ！

（チホン登場。）

（馬車の着く音。テラスの前に埃だらけのアルパートウイチ、登場。テラスの扉が開かれ、屋敷から心配そうに公爵令嬢マリーヤが登場。）

バルコーンスキイ 何だ。

アルパートウイチ 御前……御前様、スマリエーンスクが……ロシアは負けたのでしょうか。（マリーヤに手紙を渡す。）アンドリエーイ若公爵様からの……

バルコーンスキイ 読め！

マリーヤ（読む。）スマリエーンスクが占領されました。今すぐにもモスクワへお発ち下さい……

（間。）

アルパートウイチ 本当にロシアは負けたので？……

バルコーンスキイ（立上つて。）村で義勇兵を募るのだ。

そして、せいづらに武装させる！ 私は総司令官に手紙を書く。このルイスイ・ガラーに残り、ここを守り抜く！ マリーヤ、お前は（孫の）ニコールシカとデサール三人でモスクワに発つんだ！

マリーヤ 私は参りません、お父さま。

バルコーンスキイ 何だと？ 私を苦しめるのか。息子と

一緒になつて私に楯を突きおつて。私の人生に毒をもる女だ、お前は。行け！ お前の顔など見たくもない。二度と私の前に現れるな！

マリーヤ 行きません、お父さま、私は。お父さまをたつた一人ここにお残しすることは出来ません。

バルコーンスキイ チーシカ！ 勲章のついたわしの軍服を出せ。わしは総司令官のところへ行くぞ！

（チホン、部屋の中に走つて入り、退場。）

バルコーンスキイ このルイスイ・ガラーを守る手立てを講じるか、講じないか、またそこに住んでいるロシアの年老いた將軍を囚われの身にならせるか、ならせまいとするか、全ては総司令官の腹一つだ。

（マリーヤ、泣く。）

（チホン、軍服を持つて来る。バルコーンスキイに着せる。バルコーンスキイ、二三歩歩こうとする。が、チホンとアルパートウイチの手の間に倒れる。）

マリーヤ 大変！ ドウニヤーシャ、ドウニヤーシャ……先生！

（ドウニヤーシャ、走つて登場。）

バルコーンスキイ（肘掛け椅子に坐つて。）あた（ま）……

あた……いた（い）……

マリーヤ どこ？ どこが痛むの？ 心臓？

バルコーンスキイ ドウニヤーシャ！……ああ、お前、マリーヤ。有難う……。可愛いマリーヤ……。許してくれ。……

……今までのことを……。アンドリエーイを……。息子を……。呼んでくれ……。どこにいる、あれは……

マリリヤ お父さま、軍隊ですよ、お兄さまは。スマリエ
ンスクにいらっしやるのよ。

バルコーンスキイ そうだったな。．．．ロシアは終りだ。
負けたんだ!．．．(静かになる。死ぬ。)

(マリリヤ、号泣し始める。)

ドウニヤーシャ お嬢様! お嬢様!

アルパートウイツチ 神の御意志でございます、お嬢様。

マリリヤ ほつておいて頂戴、私を。そんなこと、あるも
んですか。ほつといて!

(暗転)

第九場

(前場と同じテラス。)

アルパートウイツチ おい、ドウローン、よく聞くんた。

馬鹿なことをほざくんじゃない。いいか、旦那様がチャー
ンと私にお命じになつたんだ。お前ら百姓、全員、ここを発
て。敵が来た時に、一人も残つていちゃならんとな。それに、
これは旦那様からの命令だけじゃない。ロシア皇帝様の命令
でもあるんだ。だからな、残ればお前達、祖国に対する裏切
り者ということになるんだ。分つているんだな?

ドウローン はい、分つております。

アルパートウイツチ おい、ドウローン、どうなるか分つ
てるのか?

ドウローン はい、お好きなようになさいませ。(問。)

(遠くから大砲の音が聞こえる。それから、百姓達の酔った
歌声が聞こえて来る。)

ドウローン ヤーコフ・アルパートウイツチ! お願いで
す、どうか。鍵はみんなお返しします。百姓どもの管理は、
もつとうか、お役ご免に!

アルパートウイツチ 何を言つか! お前の腹は見えてい
るぞ。お前の足元が見えるどころじゃない。その足から下二
メートルだつてお見通しだ。ああ? 一体何を企んでいる。

ドウローン 今のあいづらに．．．私に何が出来るつて言
うんです。全く鐘(たが)が外れちまいやがったんで．．．

アルパートウイツチ 飲んだくれてるのか。

ドウローン もつ全員がです、ヤーコフ・アルパートウイツ
チ。また一樽持ち出して来ました。

アルパートウイツチ いいか、荷馬車をすぐ用意するんだ!

(家の中に退場。)

(ドウローン退場。)

(問の後、背の高い百姓二人、テラスに登場。酔っている。
舞台裏に三頭の馬の蹄の音、次に三人が下馬する音が聞こえ
る。ニカライ・ラストーフ、イリイン、ラヴルシユカ、
登場。)

イリイン 遅れました。中隊長の勝ちです。

ラストーフ そうだ、どこでも俺の勝ちだ。野っ原でも、
ここでもな。

ラヴルシユカ 私の勝ちだったですがね中隊長、なにし
る私の馬はフランス産で。でも中隊長に恥をかかせるのは悪
いですから．．．

(百姓達、ぞろぞろと登場。)

ラストーフ(酔つ払っている百姓を見て。)

おい、御機嫌

だな！ どうだ、ここに干草はあるか。

イリイン どういつもこいつも、みんな似たような顔だ！

背の高い百姓（歌う。）「楽しい・・・話・・・さ・・・
よう・・・」

百姓 どうちの軍ですね？ あんた方は。

イリイン フランス軍だ。（ラヴルシユカを指差して。）

ここにおられるのが、ナポレオンその方だ。

百姓 ああ、ロシアの軍隊ですね、おおかた・・・

背の低い百姓 大勢なんですか？ 軍隊は。

ラストーフ 大勢だ。大軍だ。お前達、ここに集まって何を
している。お祭なのか。

背の低い百姓 村のことで相談があるんです。年寄り達が
集まっているんで・・・（ドウニヤーシャ、家の中からテラ
スに登場。）

イリイン おつ、あのピンクの服の女、あれは俺のだぞ。
触るな。横取りするなよ。

ラヴルシユカ おいおい、二人で仲良く行こうや。

ドウニヤーシャ 御主人の公爵令嬢の命で参りました。ど
の隊のお方でしょう。また、お名前は何と仰いますか。

イリイン こちらはラストーフ伯爵。騎兵中隊の隊長です。

そして、私は、お女中、あなた様の忠実なしもへ・・・

背の高い百姓（話をしている男女をからかって。）「話・・・
楽しい・・・話・・・」

（ドウニヤーシャ、家の中へ退場。舞台裏で話し声。暫くし
てアルパートウイツチ登場。）

アルパートウイツチ 恐れ多くも、閣下、お耳をお煩（わ

づら）わせ致します。私の御主人は、今は亡くなられました
陸軍大将、ニカライイ・アンドリエーエヴィツチ・バルコー
ンスキイ公爵の御令嬢でございますが、その御主人は只今こ
こにおります連中の不法な行為により、大変困窮しておりま
して・・・どうかもう少々こちらの方へ・・・

背の高い百姓 ハッ、アルパートウイツチ・・・ヘッ、ヤー
コフ・アルパートウイツチ・・・大変だよな・・・精々頼む
のさ。な？・・・神様にでも・・・ご大層なことよ・・・ヘッ！
（ラストーフ、にやりと笑つ。）

アルパートウイツチ それとも、こいつらのやる事の方が
面白うございませうか。

ラストーフ（テラスの上で。）いや、面白い訳ではない。
で、どうしたんだ。

アルパートウイツチ（囁き声で。）どうか、閣下、お耳を
お貸し下さい。ここにいる不埒（ふらち）な奴らめが、お嬢
様を領地から出させまいと・・・馬車から馬を外すと云って
脅しております。そのため折角朝から荷物はこちらと詰めた
のですが、お嬢様は出発することが出来ずにいるのです。

ラストーフ 何という話だ！

アルパートウイツチ はい、しかし、御報告申し上げまし
たこれが、ありのままの話でございます。

（テラスの扉開き、ドウニヤーシャ、公爵令嬢マリーヤを導
いて登場。マリーヤ、喪服姿。）

ドウニヤーシャ お嬢様、神のお助けですわ。

ラストーフ ああ、お嬢様・・・

マリーヤ このような事態になりましたのは、父の亡くなっ

た翌日からのことなのです……しかしどうか、私のこの言葉は、あなた様からの同情を買おうと思っただけではないのです……

ラストーフ このような場に偶然来合わせた私の好運を何と表現すればよいか……お嬢様の出発をお助けするために、いかなる事をも実行に移す覚悟であります。さあ、何時なりと御出立（ごしゅったつ）下さい。私の名譽に賭けてお嬢様に不快な思いをさせる人間など、誰一人出させはしません……マリーヤ 御親切、洵（まこと）に有難うございます。私の出立に障害があるなどと、きつと何かの誤解なのだと思います。お許し下さいませ。（ワツと泣き始めて。）

（ドウニヤーシャと二人、家の中に退場。）

ラストーフ（テラスで独り言。）悲しみに打ち拉（ひし）がれて……頼るものが誰一人いない……可哀相に……しかし、何ていう奇妙な運命だ。丁度この俺がここに来るとは……ああ、あの顔……何という優しさだ。何という気高さだ……

イリイン ええっ？ あつちがお気に召しましたか？ いやいや、私はピンクの方でしたね。あれはぐっと来ましたよ。（訳註 ラストーフの顔を見てハツとする。それどころではないことに気づく。）

ラストーフ よし、見ている。今に目にもの見せてくれん！ 悪党どもめが！

アルパートウィッチ どのような具合にお決めになったので？

ラストーフ 「お決めに」？ 何が「お決め」だ！ 老い

ばれ！ 貴様、目が見えんのか。貴様も裏切者だ！ 腹の中は分っているぞ。思い知らせてやる。いいか！

アルパートウィッチ 百姓どもは全く聞く耳を持ちませんでして……無理に「なに」するのは危のうございます。軍隊でも引連れて来なければ……

ラストーフ 軍隊は俺だ！ 無理に「なに」するもへちまもあるか。おい！ 誰だ、この指導者は。

カールプ 指導者ですと？ 何ですか？ 指導者とは。

ラストーフ（カールプに最後まで言わせず、顔をぶん殴る。）帽子を取るんだ！ 裏切者！ 誰だ、指導者は。

百姓一 指導者……指導者だとよ……なら、ドウローン・ザハールイッチが……

カールプ 俺達は反乱など起しちやいませんや。ちゃんと規則を守ってませあ。

背の低い百姓 昔からいろんな規則がありますで……守れないほどいろんな規則がなあ……

ラストーフ 文句を言うのか、貴様ら！ 反乱だ！ 裏切者だ！ こいつを縛れ！

イリイン こいつを縛れ！ ラヴルーシユカ（カールプを掴まえて。）丘の上の軍隊を呼びましようか？ 中隊長。

ラストーフ 指導者はどこだ！

（ドウローン、群衆の中から出て来る。大砲の音、近くなつて来る。）

ラストーフ お前か、指導者は。よし、こいつを縛れ！ ラヴルーシユカ。

アルパートウイッチ おい、そこにいる奴等！

(百姓一、その他何人かの百姓、自分の帯を解き、ドウロオンを縛り始める。)

ラストーフ 貴様達の声など、俺は聞きたくもない。いいが、よく俺の言うことを聞くんた！

(百姓の群、怯(ひる)む。)

百姓一 だけでも、私ら、何も悪いことはしやしません。

背の低い百姓 ただ私ら・・・つまりその・・・馬鹿な考えを起しまして・・・

アルパートウイッチ そら見る。言わんこつちやない。よくないぞ、お前達・・・(ドウロオンとカールプを縛り終つて、数人の百姓が引き立てて退場。)

背の高い百姓(退場して行くカールプに。)(見ろ、いいさまだ。あんなことを旦那衆に喋つていいと思つているのか。馬鹿！ 本物のどあほだ、お前は。

(ラストーフ、テラスに行く。公爵令嬢マリーヤ登場。)

マリーヤ お助け下さいまして、本当に有難うございます、伯爵様。

伯爵様。

ラストーフ そんなことは仰らないで、どうか。取締ることに携わつている人間なら誰でもやることです。私はただ、お嬢様とお会いする機会が得られたことを心から幸せに思つています。これで失礼致します。どうかお幸せに。それから、もうお礼は仰らないで。私は顔が赤くなるばかりですから。

(マリーヤの手にキス。)

(イリイン、テラスに上り、マリーヤの手にキス。ラストー

フ、イリイン、ラヴルーシユカ、退場。蹄の音が聞こえてくる。)

マリーヤ(テラスに一人残り。)(あの方が、このバグチャラヴァにいらつしやるなんて。それも選りに選つてこんな時に。そしてあの方の妹ナターシャが兄のアンドリエーイとの婚約を破棄なさるようになったらしてしまつてゐるなんて・・・(家の中に退場。)

(家の中に退場。)

アルパートウイッチ おい、お前達！(家の中を指さす。)

(百姓の一群、テラスに上る。両開きの扉が大きく開かれ、百姓達、本箱、その他の品々を運び出し始める。)

百姓一 おい、急に持ち上げるんじゃないぞ。ゆつくりだ、ゆつくりだ。

背の低い百姓 重いからな。おい、本はえらく重いんだ・・・

丸顔の百姓 そうそう、よく勉強していらしたからな・・・ちつとも遊びもせんで・・・

(大砲の音。)

(暗転)

第十場

(ボロジノの戦いの前夜。納屋の中。灯。アンドリエーイが横になつてゐる。)

語り手 明日の戦いのための上からの命令は全て受領し、部下に伝達済みであつた。彼には今や、何もすることがなかつた。しかし、ある想念が・・・非常に単純ではつきりした・・・従つて最も恐ろしい想念が、彼に平常心を与えなかつた。彼には分つてゐた。明日の戦いは、彼の生涯で経験したどんな

戦いよりも恐ろしいものになるだろうことを。そして、自分が死ぬかもしれないという気持が、生れて初めて、強烈な真実味を帯びて、単純にそして恐ろしい勢いで彼の心に迫った。

アンドリエーイ そうだ。これが俺を騙してきた幻影なのだ。俺の心を動揺させたり、魅了したり、苦しめたりしてきた。……まづは名誉、次に社会の幸福、一人の女性への愛、それに祖国……みんな幻影だ。何てこれらは大きく見えたことだろう。何て深い意味に満ちた物に見えたことだろう。それが、今朝起きて、太陽が上って……そう、俺にはこれは、俺自身のために上ってくれたように思えた……その朝日のもとで見たら、それら全て、まるで単調で、蒼白く、粗野なものにしか見えなかった。愛！あの少女！俺には謎に充ち満ちた力に見えた……ああ、どんなに彼女を愛したことだろう。彼女との幸せについて詩的な計画まで建てていたのだ、俺は。何ていう子供だ、この俺は。理想的な愛……そんなものを俺は信じていた。俺がいなくても、丸々一年、彼女の誠実は保たれる筈だ、などと。現実には単純極まりなかった。恐ろしく単純、恐ろしく醜悪なものだった！

祖国？モスクワの滅亡？とにかく明日俺は死ぬのだ。それも敵のフランス人の手にかけて……でさえないかもされない。昨日も味方の兵が俺の耳のすぐ傍で、誤って小銃をぶつ放したじゃないか。俺は死体になる。足と頭を持ち上げられて、穴に投げ込まれる。すると新しい世界の条件が出来る。俺以外の連中には相も変らぬ同じ世界だろう。しかし俺には、それは無縁のものだ。俺がその中にいないのだから。

語り手 彼はその自分のいない世界をはつきりと思い描いた。あの光、あの影の中に鮮やかに存在する白樺の木々、あの焚き火の煙……自分の周りにあるこれら全ての物が、彼には何か恐ろしい、自分を脅えさせるもののように見えた。背中にぞっと冷たいものが走った。

(舞台裏でピエール「Quebec」(糞ッ、何だこれは))

(何かにつまづいて倒れる音。)

アンドリエーイ 誰だ！

(灯火を持って、ピエール登場。)

アンドリエーイ あーっ。おやおや、どうなっているんだ、運命は。まるで予期していなかったな。

ピエール 僕がその……やって来たのは……それはつまり……面白いだろうと……明日の戦いを見たいと思つて……

アンドリエーイ そうそう、面白い……さぞかしね。それで、君の同士のフリーメイソンのお方々は戦争についてどんな御託を述べていらつしやるのかな？これを未然に防ぐには如何にすべきか、などと言つてるんだらう？さあ、それで、モスクワはどうなんだ？僕の家族は？モスクワには着いたんだらうな？

ピエール うん、着いている。

(間。)

ピエール それで君、どう思う？明日の戦いは、勝つか？

アンドリエーイ うん、勝つ……ただ一つ、僕にその権力があれば実行したいことがある。それは、敵を捕虜になど

決してしない。これだ！ 騎士道など、馬鹿なことだ。フランスの奴等は僕の家を破壊した。そしてモスクワを破壊するために進撃している。奴等は僕の敵なのだ。僕の理解では、奴等は全部犯罪者なのだ。根こそぎ処刑すべきなのだ。

ピエール そうだ。僕も全く君に賛成だ。

アンドリエーイ 明日は両軍がぶつかる。そして数万の人間が死んで行く。その後は神に捧げる感謝のお祈りだ。天にまします神か。それを一体、どんな気持で見、どんな気持で聞くというのだ！ そうだ。ねえ君、最近僕は生きるのが辛くなってきた。あまりにもいろんなことが分り過ぎてしまったせいらしい。善悪の判断を与えてくれる木の実を食べるのは、人間がやってはいけないことなんだ。まあいい、それももうすぐ終りだ。君はすぐにゴールキーに行った方がいい。戦闘が始まる前にね。僕はもう寝なきゃ。さようなら。すぐ発つんだ。また会えるかどうか、それは……（ピエールに接吻。ピエール退場。）

語り手 アンドリエーイは目を瞑（つぶ）った。ナターシャが生きて生きた、興奮した顔でアンドリエーイに話しかけている。去年の夏のこと。「私はきのこを探りに、大きな森に入って、道に迷ってしまった。……でも、うまく話せないわ……森がどんなに深かったか、私の心はどんなだったか。養蜂場の人が現れて、どんな話をしたか……私、支離滅裂だわ」と、ナターシャが言つ……

アンドリエーイ 僕はその話がよく分った。あの誠実さ、あの心からの真情の吐露……僕はそれをこそ愛したのだ……そうだ、あいつには……クライギンの奴などに、これが分つ

ている筈がない。あいつにはこういうことは見えっこない！ あいつにはただ、綺麗でピチピチした女の子が見えていただけなのだ。それで、今でもあいつは生きている。そして愉快にやっているのか！（飛び起きる。）

（暗転）

第十一場

（絶え間ない大砲の轟き。煙が立っている。丘の上。スマリエーンスクの巨大な聖母マリアのイコン像。その前に焚き火。敷物が敷かれた長椅子の上にクトゥーゾフ。老齢のための、身体の弱りと疲れのため、うたた寝をしている。クトゥーゾフの傍にはお付きの将校一人。）

副官（登場して、クトゥーゾフの前で直立不動の姿勢をとる。）フランス軍に占領されていた堡壘（ほうるい）を取り戻しました。バクラチオン公爵が負傷です。

クトゥーゾフ そうか……（副官に。）公爵のところへすぐ行け。負傷の様子を詳しく聞いてきてくれ。

（副官退場。）

クトゥーゾフ（ヴィルチェンベルスキ公爵に。）ヴィルチェンベルスキ公爵、あなた、第一軍の指揮を取って貰えますかな？

（ヴィルチェンベルスキ公爵退場。）

副官二（暫くして登場。）ヴィルチェンベルスキ公爵よりの要請であります。一部隊の援軍を戴きたいと。

クトゥーゾフ（顔を曇める。）命令だ。第一軍の指揮をダフトゥーロフに任せる。この大事な時に、この本部をヴィル

チエンベールスキイ公爵なしですませるわけには行かない。
公爵はこちらに戻すように。

(副官二退場。)

副官三(走って登場。)(ミュラートを捕虜にしました。

お付きの将校 おめでとつございます、総司令官殿！

クトゥーゾフ おめでとつはまだ早いな。我々は戦闘に勝っている。ミュラートが捕虜になるなど、当然のことだ。しかし、喜ぶのはもう少し後にしよう。ただこのニュースだけは全軍に知らせるように。

(シチエルビーニン、走って登場。味方が不利」という表情。

クトゥーゾフ、「報告は私だけに」という身振り。)

シチエルビーニン(小さい声で。)(セミヨーノフスコエ村は敵に占領されました。

クトゥーゾフ(足が痛いかのような呻き声を上げて立上る。

イエルモーロフを傍に招いて、傍白。)(行って見て来てくれ、イエルモーロフ。あそこがもう本当にどうにもならないのかどうか。

(イエルモーロフ退場。コックと当番兵、クトゥーゾフに食事を出す。クトゥーゾフ、鶏を齧(かじ)る。)

ヴァリツオーゲン(登場。訛りのあるロシア語で。)(我々が保持していた地点は、全て敵の軍門に下りました。奪還の手立ては何もありません。応援部隊が皆無だからです。全軍退却中で、彼らを止(とど)めるすべはありません。(間。)(私が見て来たところのものを、ありのまま閣下に御報告するのが私の義務と考えまして・・・つまり、我軍は総崩れでありまして・・・)

クトゥーゾフ(急に立上る。)(君は見た?・・・見たと言
うのか、本当に。全く何という・・・何という厚かましさだ!
ねえ君! 君はこの私の前で平然と、よくもよくも、そんな嘘八百を並べたてられたものだ。君は何一つ知ってはいない。私からといって、バルクライイ将軍にちゃんと報告するんだ、いいか。「そちらの情報は正しくない。この戦闘の真の成行きは、この私、総司令官に一番よく分っている。バルクライイなど何も知りません」とな。

(ヴァリツオーゲン、何か言い返そうとする。)

クトゥーゾフ 左翼においても、右翼においても、敵は総崩れだ。いいかね君、もし君にそれがよく見えないんだしたら、知りもしないことをあれこれ報告するのはやめてもらおう。バルクライイ将軍のところへ行って、明日のことについて私の意図を次のようにはつきりと報告するんだ。「明日は必ず敵に攻撃をしかける」と。(間。)(到る所で敵は負けている。このことを私は神に感謝する。そして私の勇ましい軍隊に感謝する。敵は敗北だ。明日我々は、奴等をこの聖なるロシアの土地から追い出してくれるのだ!(十字を切る。噁り泣く。)

(全員沈黙。)

ヴァリツオーゲン(クトゥーゾフから離れて傍白。):
Eingornheit des alten Herrn... (独「全く・・・じじい奴、一人でいい気になって・・・」)

(ライエーフスキイ登場。)

クトゥーゾフ ああ、ライエーフスキイか、待ち焦がれていた。さあ、話してくれ。

ライエーフスキイ 我が軍は頑強に持ち場を守っています。フランス側は攻撃を諦めたようです。

クトゥーンゾフ Vous ne pensez donc pas comme les autres, que nous sommes obligés de nous retirer? (では君は他の連中のような考えは持っていないな? 我々が退却すべきだなどは。)

ライエーフスキイ Au contraire, votre altèsser! (とんでもない。その反対です、総司令長官閣下。)

クトゥーンゾフ カイサーロフ! さ、坐つて。明日の命令を書きとめるんだ。(別の副官に。)

それから君、君はすぐ前線に行つて、明日は攻撃だ、と説明して来い! (暗闇)

語り手 「軍の士気」と呼ばれ、戦争においては大切な役割を果す、軍全体うつて一丸となる何かの気分というものがあるが、その説明のしようのない不思議な結びつきにより、クトゥーンゾフの言葉・・・即ち、明日の戦闘に関する命令・・・は、あつと言つ間に全軍の隅々にまで浸透したのだった。

第十一場

語り手 その日、その恐ろしい戦場の光景が、彼の精神力を打ち砕いた。その精神力こそ、彼が自分の最大の長所、偉大さであると自負していたものだったのに。浮腫(むく)んで黄色く、はれぼつたい顔、濁つた目、赤い鼻、そして声は嘎(しゃが)れて目を上げることもなく彼は坐つていた。

(丘。大砲の響き。ナポレオン一人。それに、子供の肖像画あり。ナポレオンの息子「ローマ王」である。)

語り手 野原の上にゆっくりと立ち昇っている火薬の煙の

中に、累々と横たわる馬と人の死体。このように小さな空間にあるこのような量の死体のある光景は、未だかつてナポレオンが見たことのないものであった!

彼はこの戦闘の終結を、病的なまで待ち焦がれていた。自分がこの戦闘をしかけた人間であると自認していたが、止めさせることは出来なかつたのである。自然な、人間的な感情が、ほんの短い一瞬であるが、ふと、長い間培(つちか)つてきた人工的な、幻の感情より優位に立った。戦場で見た苦痛と死を自分のものとして受け取つたのである。頭も重く、胸も重く、苦しみも死も、やがて自分にやって来るものとして認識したのである。この瞬間、彼にはモスクワも、勝利も、名譽も不要だった。「名譽も不要」・・・当然だ。何故これ以上の名譽が必要か。今この時、彼が欲しかったものはただ、休息、安心、それに自由だった。

(副官、へとへとになつて丘を上つて登場。)

語り手 「我が軍の砲火は、敵軍を薙(なぎ)倒しております。しかし、敵は退(ひ)きません」と、副官が報告する。

ナポレオン *Is en veulent encore?* (連中はもっと欲しいのか。)

副官 は? 何と仰せられます?

ナポレオン *Is en veulent encore, donnez leur-en!* (欲しいならもっと食らわしてやれ。)

(副官退場。)

語り手 連中はもっと欲しいのか・・・とナポレオンが言う・・・それならもっと食らわしてやれ! そんな命令がなくとも、その意志は実行されていたであろう。彼が命令した

のはただ、自分にその命令が期待されていることを知っていたからだけなのだ。即ち、彼は再び悲しむべき非人間的な役割を、運命によって予め定められた通り従順に実行したのである。

(暗転)

第十三場

(野外診察手術用テント。砲火の音、少し小さく聞こえる。しかし、それ以外に間断ない人の呻き声、叫び声が聞こえて来る。そしてカラスのカアカアという泣き声。)

(傷ついた兵士が横たわって順番を待っている。頭と手に包帯を巻いた茶色の髪の下士官が、その傍に立って、興奮して話している。)

茶色の髪の下士官 俺達は奴をそこから炙(あぶ)り出して、追い立てたんだ。やつこさん、命からがら、何もかも放り出して逃げた。おう、そうさ。敵の王様その人だぜ。あの時、補助隊の応援がありさえすりゃな、取捉(とつつか)まえていたところさ。そうなりゃ、王様もへちまもあるもんかい。本当だぞ・・・本当なんだ、これは・・・

(テント内部の仕切りのところから、外科手術助手達が、包帯をしたアンドリエーイを運び込み、ベンチの上に置く。)

傷ついた兵士 そうか、あの世でも紳士の身分つてやつは効き目があるのか!

軍医(外科助手達に。)連れて行け! 脱がせろ!

(外科助手達、傷ついた兵士を運び去る。(訳註 プルガーコフは原文を作り変えている。原文ではアンドリエーイの服

を脱がせると命令し、その後アンドリエーイの手術を行う。)

軍医、アンドリエーイの顔に水をかける。アンドリエーイ、意識を戻す。軍医、アンドリエーイの唇に自分の唇をあて、その息を確かめ、傷ついた兵士が運ばれた場所に退場。)

茶色の髪の下士官(興奮して。)そうさ、あの時応援が来ていさえすりゃ・・・補助隊がな・・・(退場。)

(外科助手達が瀕死の重傷を負ったアナトリー・クラージンを運んで来て、ベンチの上に置く。アナトリーは気絶している。)

アンドリエーイ(アナトリーを見る。弱々しく喋る。)

縮れた髪、この色・・・何が記憶にある髪の毛だ・・・誰なのだ・・・誰だ、この男は・・・そうだ、クラージンだ。ああ、何ていう結びつきだ、この男と私は。こんなところで、こんな場所で・・・こんなに近く・・・何が二人をこんなに・・・

・ナターシャだ! ああ、ナターシャ! あのすらりとした首、手、一瞬にして歓喜の表情に変化するあのびっくりした幸せな顔・・・ナターシャ! ああ、思い出したぞ、何もかも。私はこの男を軽蔑し、何としても会おうとした。この男を殺すために。或はこの男に私を殺す機会を与えるために!(泣く。)

ああ、何ていう愚かなことだ。・・・人間全ての愚行、そしてこの私の愚行!・・・

軍医(外科助手と共に急いで登場。アナトリーに近づく。唇に唇を近付ける。)

何故ぼんやり立っている。早く死体を運ぶんだ。

第十四場

語り手 野つ原には何万という人間が様々な姿勢で、そして様々な軍服を来て、死体として横たわっていた。この場所は何百年もの間、バローディー村の百姓達が麦を収穫し、家畜を放牧していたところであった。

(夜。丘と野原。死体が累々と横たわっている。丘にピエール、灯を持って登場。)

ピエール ああ、今僕が、心の底から欲していること、それは唯一つだ。普通の暮しに戻りたい。自分のベッドで長々と横になって寝たい。それだけだ。今の今、見て来たこと、経験したこと、それにこの自分自身のこと、何が何だか分からない。普段の暮しに戻って、初めてそれが理解出来るように思える。しかし普段の生活など、どこを捜したってありはしない! ぞっとする・・・ぞっとする話だ。みんな奴等のせいなんだ、これは!(興奮して。)俺はロシア人、ベズーホフだ! ナポレオンの奴め! あいつを、俺は殺してやる!(地面に腰を下ろし、灯火の傍でやっと静まる。)

(釜を持った兵士登場。間。)

釜を持った兵士 おい、あんた! あんたはどこ者だ? ピエール 私?・・・私は・・・(間。)身分は義勇軍の士官なんです、部下がいなくなっただんです。・・・戦闘が始まってちりぢりになって・・・

釜を持った兵士 おいあんた。どうだ、食うか? ごった煮だな。(坐る。釜を差します。)

(ピエール、ガツガツと食べる。)

釜を持った兵士 おいあんた、それで、どこへ行くんだ。

ピエール マジャーイスクです。

釜を持った兵士 あんたはどうやら貴族だな?

ピエール ええ。

釜を持った兵士 何て言うんだ? 名前は。

ピエール ピョートル・キリーラヴィッチ。

(間。馬の蹄の音。それから、人の足音が聞こえてくる。ピエールの馬丁登場。)

馬丁 ああ、旦那様。よかった。もうすんでのところで、諦めるころでした。

ピエール ああ、そうだな・・・

釜を持った兵士 部下の人で? 見つかりましたか。じゃ、これで失礼を、ピョートル・キリーラヴィッチ・・・でしたね?

ピエール じゃ、失敬。(ポケットに手を入れて。)金をやるべきか?・・・

語り手 いや、やらない方がいい。

(暗転)(第一幕終)

第三幕

第十五場

(八月三十一日。ラストーフ家の屋敷。扉は全て開け放たれている。全ての家具、鏡等は移動され、絵画は壁から下ろされている。衣装箱、干し草、紙、紐、が散らばっている。中庭から声が聞こえる。人々が引越用の荷物を荷馬車に詰め込んでいる声である。)

(玄関におぼつと、顔色の蒼い負傷した士官が登場する。)

マーヴラ・グズミーニシナ まああなた、じゃ、モスクワ

にはどこにも知りあいがいないのね？ どこか部屋があると落ち着くの。

(ナターシャ、部屋に登場。この言葉を聞く。)

マーヴラ・クズミーニシナ　じゃ、家にいらしたら？ この家、家族中で引越すのよ。

蒼白い顔の土官　許可が出るかどうか分りませんが・・・ああ、上官が来ました。訊いてみて下さい。

ナターシャ(玄関へ出る。開いた窓から外に話しかける。)
負傷兵をうちに置いていいでしょうか。

少佐(玄関に登場。)
何の御用でしょう、お嬢さん。(考えて。)
ああ、ようございますとも、勿論。(退場。)

(蒼白い顔の土官も退場。)

ナターシャ(マーヴラ・クズミーニシナに。)
いいって言ったわ、あの入。

マーヴラ・クズミーニシナ　でもやっぱり、お父さまにはお話しにならなければ。

ナターシャ　いいのよ、いいのよ。たいしたことじゃないでしょう？
だって、私達がみんな一晩、客間で寝ればいいんですもの。お家の半分全部貸してあげたって大丈夫よ。

マーヴラ・クズミーニシナ　でもお嬢様、やはりちょっとお考え下さい。たとえ離れただけだって、お貸しするなら一言お話しにならなければ。(退場。)

ナターシャ　そう。じゃ、訊くわ。(休憩室へ行き。)
マ、寝ていらつしやるの？

伯爵夫人　あら私、ウトウトと・・・

ナターシャ　ママ・・・ねえママ・・・ご免下さい。許し

て。もう決してしない。私、ママを起しちゃった。ねえ、マーヴラ・クズミーニシナに訊いて来いって言われたの。ここに負傷兵を連れて来ていい？ 土官なだけど。いいわよね？
だってどこにも行き場がないんですって。ママ、お許しになるわね？

伯爵夫人　土官って何？ 誰を連れて来るんだって？ 何のことかさっぱり分らないわ。

ナターシャ　私、分ってる。お許しになるって・・・そのように言いますからね。(休憩室から走って出る。)
マーヴラ・クズミーニシナに言う。(いいってよ！)

マーヴラ・クズミーニシナ(玄関で窓の外へ。)
ばあや！ その方を独身部屋にお連れして。(退場。)

伯爵(玄関から登場。)
出遅れたよ、私達は。クラブは見せじまい、それに警察も出払ってしまった。

ナターシャ　パパ、負傷兵の方(かた)を家に入れたっていいわね？

伯爵　当り前だ。何も問題はない。今はそれどころじゃないぞ。くだらんことにかかづらわっていいないで、早く荷造りをして、出発するんだ。ヴァスィーリイチ！
ヴァスィーリイチ！(退場。)

(ソーニヤ、ヴァスィーリイチ、コック、登場。せかせかと準備。)

ヴァスィーリイチ　三つ目の箱が必要ですね、これは・・・

ナターシャ　ソーニヤ、待つて。二つで大丈夫。全部入れてしまつわ。

ヴァスィーリイチ　駄目ですよ、お嬢さん。もうやって

みたんですから。

ナターシャ いいえ、待つて。やってみるんだから。

ヴァスィーリイチ これだけじゃないんですよ。まだもう一枚、絨毯もあるんですし……

ナターシャ 分った。待つて。いい？……（箱から古い皿を何枚か取り出す。）これはいらぬわ！

ソーニヤ もうほつといて、ナターシャ。それは一杯。私達がやりますから。

ヴァスィーリイチ さ、お嬢様……
（召使一人登場。手助けを始める。）

ソーニヤ 分ったわ、ナターシャ。でもこれは一杯。もう一枚上の絨毯を取らなきゃ！

ナターシャ 駄目、これは。ペーチャ！ ペーチャ！
（ペーチャ、走って登場。軍服姿。）

ナターシャ さ、これを締めるのよ、ペーチャ。
ペーチャ（箱の蓋の上に坐る。）締まれ！ そら！ 締まれ！

ナターシャ ヴァスィーリイチ！ さ、押して！

（箱の蓋締まる。ナターシャの目から喜びの涙が迸る。コック、召使、ペーチャ、ナターシャ、それぞれ物を持って退場。

ヴァスィーリイチも同様に退場。玄關の扉が開き、老齡の侍僕と、マーヴラ・クスミーニシナ、登場。）（訳註 この侍僕はアンドリエーイのお付きの者。）

マーヴラ・クスミーニシナ さあさあ、どうぞ。私どもの所へ。家の人達はみんな出るんです。家中空っぽになるんですから。

老齡の侍僕 そうですか。家はモスクワにあるのですが、何しろ遠くて、とても辿り着くのは無理と……

マーヴラ・クスミーニシナ どうぞどうぞ、私どもの方へ……それで、随分お悪いのですか？

老齡の侍僕 家まで運ぶのはとても無理で……（窓から外へ）中庭の方に廻して……中庭に！

（老齡の侍僕退場。その後からマーヴラ・クスミーニシナも退場。ソーニヤ、窓から外を見、それから走って退場。）

伯爵（登場。）ヴァスィーリイチ！
（ヴァスィーリイチ登場。）

伯爵 どうだ、用意は出来たか。
ヴァスィーリイチ はい、今すぐにでも、旦那様。

伯爵 よし、いいぞ。神様のお陰だ。
（ヴァスィーリイチ退場。蒼白い顔の士官、看護兵と共に登場。）

蒼白い顔の士官 伯爵殿、大変申し上げ難いのですが、どうかその……お願いです……荷馬車のどこにでも結構です、乗せて戴く訳にはまいりませんか。私には、ここに全く知りあいがいませんで……荷物の上にも構いません、どうか……

看護兵 どうか、閣下！……

伯爵 ああ、そうですか……それは、その……喜んで……おい、ヴァスィーリイチ！……ヴァスィーリイチ！

（ヴァスィーリイチ登場）

伯爵 お前、差配してな。一台か二台、荷馬車の荷物を下

ろして……何だ……ちゃんと乗れるように……

少佐（登場。） 伯爵殿！

伯爵 ああ……そうですな……ああ、皆さん……ええ、喜んで、その……ええ、ええ……ヴァスリーリッチ！

ヴァスリーリッチ どうか旦那様、御自身で御指示を。まづは絵ですが、絵は如何致しませう？

伯爵 うん、そうだな。まあ、何かは下ろせる筈だ。置いて行ける筈だ……

（ヴァスリーリッチ、蒼白い顔の士官、少佐、看護兵と共に退場。）

（ヴァスリーリッチ、蒼白い顔の士官、看護兵と共に退場。）
（暫くしてマトリヨナ・チマフェーイエヴナ、走って登場。休憩室に突進する。）

マトリヨナ・チマフェーイエヴナ（伯爵夫人に。） 奥様！

伯爵夫人 え？ 何？ 何ですか？

マトリヨナ・チマフェーイエヴナ マーリヤ・カールロヴナが怒っております。とても……

伯爵夫人 えっ？ マダム・シヨッスが怒っているって？ どうして？

マトリヨナ・チマフェーイエヴナ あの方の衣装箱が荷馬車から下ろされてしまったんです。

伯爵夫人 何ですって？

マトリヨナ・チマフェーイエヴナ そつなんです、奥様。

荷馬車の紐が全部解（ほど）かれて家財は下ろされて……その代りに負傷兵達をそこに……伯爵様はお人がよくって、乗せてやれとお命じになったのです。でもお嬢様方の夏服を

全部捨てて行くなんて、そんなこと出来ませんわ。

伯爵夫人 旦那様を……旦那様を呼んで……マトリヨナ・チマフェーイエヴナ 少々お待ちを。（走って退場。）

（暫くして休憩室に伯爵登場。ナターシヤ、その後をこっそりとつけて来て、休憩室の会話を盗み聞きする。）

伯爵夫人 あなた、どういうことですか？ 家財を下ろさせていると言っじゃありませんか？

伯爵 なおお前……実はその、話しておかきやと思つていたんだが……その……何だ……機嫌を直して……実はその、士官がやって来てな……頼むんだよ、負傷兵に荷馬車を少々譲ってくれんかとな……荷馬車にある物など、また買えばすむ。負傷兵を残したら、お前、一体どうなると思つ？ な？ 分つてくれ。いい子だから、頼むよ……³¹荷物を下ろさせてくれ……

伯爵夫人 いいですか、あなた。あなたは今までにもう、家に何一つ残らなくなるまで家財をお捨てになつて、今度は、子供達の物まで全部放棄しようというのですか。いいえ、あなた、私は反対ですよ。どうしてもそんなことはさせません。負傷兵には政府というものがあるでしょう。他の家を見て御覧なさい。ラプーヒン家など、もう二日も前にすつかり荷造りして、さっさと出て行ったじゃありませんか。これが良いお手本です。馬鹿なのは私達だけです。私のことを哀れと思つて下さらないのなら、せめて子供達のことでも考えてやって……

ナターシヤ（嵐のような勢いで部屋に入り。） そんなの卑

怯！ そんなの下劣！ そんなこと決してしてはいけないわ！
ね、ママ。そんな命令、取り消して！ ほら、中庭を見て！
あの人達を残して、いいて言うの？

伯爵夫人 どうしたんだい、お前。あの人達って、誰のこと？ お前、どうして欲しいっていうんだい？

ナターシャ 負傷兵よ！ 分るでしょう？ ママ。駄目よ、ママ。あんなこと言っちゃ。あんなのないわ。置いて行くなんて・・・そんな・・・そんな・・・

伯爵夫人 いいわ、勝手になさい。人の邪魔なんか、私はしないんですからね。

ナターシャ ママ・・・有難う、ママ。・・・私を許してね！

伯爵夫人（伯爵の方を向いて。）あなた、あなたがいいように指図して・・・私、こういうことは分らないの。

伯爵（涙を流して。）負った子に教えられ・・・か・・・
ナターシャ パパ、ママ、私がやっていいかしら。ね？

私が・・・（走って退場しながら。）荷馬車は全部、負傷兵に譲って。荷物は物置に戻して頂戴。

（伯爵退場。）
（ソーニヤ、旅の服装で登場。そのあとに小間使、登場。）
ソーニヤ あの馬車はどなたの？

小間使 お嬢様、御存知なかったのですか？ 公爵が負傷していらっしやるのです。私達と一緒に発つんですのよ。

ソーニヤ 公爵って、どなた？ 苗字は？
小間使 ナターシャお嬢様の許嫁だった方。バルコンス

キイ公爵様ですの。重体なんですって。

ソーニヤ（休憩室に走って入る。）ママ、アンドリエーイ公爵が負傷して重体でここにいらっしやるんですって。私達と御一緒に出発なさるって・・・

伯爵夫人（驚いて。）ナターシャはそれを・・・？
ソーニヤ まだ知らないの。でも、御一緒にここをお発ちになるのよ。

公爵夫人 お前今、重体って言ったね？（泣く。）神様のなさることは人間には分らないものね。
ナターシャ（登場。旅装。）さ、ママ、用意は出来たわ。

あら！ どうしたの？
伯爵夫人 どうもしないわ。用意が出来たのなら出発ね。

ナターシャ（ソーニヤに。）どうしたの？ ね、何があったの？

ソーニヤ 何って？ 何も無いわよ。
ナターシャ 私に何か酷く悪いこと？ 何なの？

（伯爵、ペーチャ、マーヴラ・クズミーニシナ、ヴァスリーリイチ、登場。全員集まって十字を切る。去って行く五人、居残るマーヴラ・クズミーニシナとヴァスリーリイチに抱擁。そして退場。マーヴラ・クズミーニシナとヴァスリーリイチも見送りのため退場。ラストーフ家、空になる。）
（暗転）

第十六場

語り手 ボロジノの戦いからモスクワへ帰る途中、ピエールは自分の義理の兄、アナトーリと友人アンドリエーイの死を知らされる。モスクワの自宅に着いた時はもう暗くなって

いた。この時彼の家にはピエールに指示を仰ぐために、七八人の雑多な人間がやって来ていた。ピエールは話を聞いてもまるで理解できず、また興味も全くわかなかつた。従つてこれらの人間から出来るだけ早く逃れるためのいい加減な返事をして、一人づつ追い払つた。やっと一人になり、妻から来ていた手紙の封を切り、読んだ。手紙には、自分はN・Nと結婚するつもりであると通告し、従つて、離婚のための必要書類を揃えて欲しいと書いてあつた。「砲兵中隊のあの兵隊達……公爵アンドリエーイは死んだ……苦しむことが必要だ……妻は誰かと結婚する……忘れなければ……そして理解しなければ……」ピエールはベッドに近づき、着替えもせずそこにごろりと横になり、すぐさま眠りについてしまふ。翌朝彼は、急いで着替えをすませ、彼を待っている人達の前に顔を出すことは止め、こっそりと裏の木戸をくぐり、通りへ出て行つた。

その時以来、モスクワ陥落の日まで、ベズーホフ家の誰一人、八方手を尽したにも拘らず、ピエールを見たものはなく、またその所在を知っている者はいなかつた。

(故ヨスイフ・アリエクスエーイエヴィツチ・バズデーイーエフの家。)

ピエール(扉のところ。)

ピエール(扉のところ。)

御在宅ですか？

ガラスイーム 現在のこの情勢です。奥様のソフィア・ダニローヴナは子供を連れてタルジョーク村に避難なさいました。

ピエール とにかく私は入るよ。本を整理してくれと頼ま

れているんだ。

ガラスイーム どうぞどうぞ、お入りを。故人の兄の……どうか故人に神の御加護を……マカール・アリエクスエーイエヴィツチが一人お残りになつて……御存知でいらつしゃいますか？ 健康がすぐれませんか……

ピエール ああ、知っている、知っている……

(マカール・アリエクスエーイエヴィツチ、扉からちよつと覗き、ブツブツ独り言を言い、また退場。)

ガラスイーム 随分頭のよいお方だつたのですが、御覧になつてお分りの通り、ひどく弱つておしまいになりました……(鎧戸を開ける。)

奥様からのお言い付けでした。もしあなた様がいらつしゃれば、本をお任せするようにと。(退場。)

ピエール(原稿を引き出しから取り出す。考える。)

どうしてモナポレオンに会う。そして奴を殺すのだ。こちらが死ぬか、それともナポレオン一箇のために惹き起こされた全ヨーロッパの不幸に、これで終止符を打つか。そうだ、全体のため一人が犠牲になる。やり遂げるか、死ぬか、そのどっちかだ。そうだ、俺は奴に近づいて……そして突然……ピ

ストルが短剣か、どっちにする。まあいい、どっちでも同じだ。「殺すのはこの私じゃない。神の手が罰するのだ」、そう俺は言つてやる。それから後は「さ、この俺を引つ立てろ。好きなように罰すればいい」、そう言つた。(考え込む。)

(ガラスイーム、扉のところへ来て、咳払いをする。)

ピエール(我に返る。)

ああ、そうだ、ガラスイーム。君に頼んでおくが、私の正体を誰にも言つてはいかん。それから、ちよつと頼みがある。

ああ、そうだ、ガラスイーム。君に頼んでおくが、私の正体を誰にも言つてはいかん。それから、ちよつと頼みがある。

グラスイーム 畏まりました。何か食べるものでしょうか。
ピエール いや、食事じゃない。百姓が着る着物とピストルが欲しいんだが。

グラスイーム(ちよつと考えて。) 畏まりました。(退場)
暫くしてカフタン(長裾の上衣)、帽子、ピストル、それに短剣を持って登場。ピエールの着替えを手伝い、退場。)

マカール・アリエクスエーイェヴィッチ(登場して。) あいつら、怖気(おじけ)づきやがった。いいか、俺は降参などするものか。フランス兵など屁のかっぱだ。・・・なあ、あんた!(突然机の上からピストルを取り上げる。)

ピエール あっ!
(グラスイーム、走って登場。ピストルを取り上げようとする。)

マカール・アリエクスエーイェヴィッチ 武器を取れ! 肉弾戦だ! やい、取れるものなら取ってみる。

グラスイーム 大抵にして下さい! もう御冗談は! 馬カール・アリエクスエーイェヴィッチ 貴様は誰だ。ボナパルトか。

グラスイーム いけません、旦那様。さあ、ピストルをこちらへ。

マカール・アリエクスエーイェヴィッチ あっちへ行け。汚らわしい奴隷め! よし、肉弾戦だ!

(突然扉のところで女の叫び声、そして扉を叩く音。)
料理女(走って登場。) 奴等です、旦那様方! ああ、神様・・・とうとう奴等が・・・(退場。)

(グラスイームとピエール、マカール・アリエクスエーイェ

ヴィッチを放す。マカール・アリエクスエーイェヴィッチ、ピストルを持って走って退場。ランバリーとモレーリ、登場)

ランバリー Bonjour, la compagnie! (やめ諸君、今日は。)(グラスイームに。) Vous êtes le bourgeois? (あなたがこの

家の主(あるじ)で?) Quartier, quatre logement. (quartier はロシア語の住み家(クヴァルチール)のつもり。住み家を、

住むところを頼む。) Les français sont de bons enfants. (フランス人はいいやつぞ。)

Ne nous faisons pas, mon vieux. (まあ、仲良くやるつや、な?)
グラスイーム 主(あるじ)?・・・違つ。・・・分らない・・・私・・・あなた・・・

マカール・アリエクスエーイェヴィッチ(突然走って登場) 肉弾戦だ!(ピストルで狙つ。)

(ピエール、マカール・アリエクスエーイェヴィッチに飛びかかる。マカール、引き金を引く。グラスイーム、馬で逃げ

去る音。料理人が大声で泣き始める。)

ピエール Vous n'êtes pas blessé? (お怪我はありませんでしたか?)

ランバリー(身体のあちこちを触ってみて。) Je crois que non, mais j'ai manqué belle cette fois-ci. (ツレ、怪我はない。今回は運良く逃れたな。)

Quel est cet homme? (誰だ、この男は。)

(モレーリ、マカール・アリエクスエーイェヴィッチを掴まえている。)

ピエール Ah, je suis vraiment au désespoir de ce qui vient d'arriver. (いやつしも、大変なことをやっちゃって。実に

申し訳ありません。) C'est un fou, un malheureux, qui ne savait pas ce qu'il faisait. (この男は氣違いなんです。可哀相な奴で、自分のやっていることが分っていないんです。)

ランバリー (マカール・アリエクスエーイエヴィツチの襟首を掴まえて。) Brigand, tu me la payera. (この野郎！ たっぷりお返しはせせて貰へぬ。) (ピエールに。) Vous m'avez sauvé la vie! (君は命の恩人だ。) Vous êtes Français? (君はフランス人かぬ。)

ピエール Je suis Russe. (私はロシア人です。)

ランバリー Ti ti ti, a dautre. (いやいや、それは違う。) Vous êtes Français. (君はフランス人だ。) Vous me demandez sa grace. (この男の命乞いをしたな。) Je vous l'accorde. (分つた。命は助けやん。) Qu'on emmène cet homme. (この人を連れて行け。)

モレーリ (マカール・アリエクスエーイエヴィツチを部屋から突き出し、退場。また戻つて来て。) Capitaine, ils ont de la soupe et du gigot de mouton dans la cuisine. (隊長、台所にスープがあります。それに羊の肉も。) Faut-il vous l'apporter? (持つて来ませうか。)

ランバリー Oui, et levini! (持つて来い。それから酒もだ。) (ピエールに。) Vous êtes Français. (君はフランス人だ。)

Charme de rencontrer un compatriote. (いやあ、同国人に会えるとは、うれはうれだ。) Ramball, capitaine. (隊長のランバリーは、よるこ。) (ピエールの手を握る。)

(暗転)

第十七場

(夜。前場と同じバズデーイエフの部屋。窓の外に彗星、そして火事による照り返し。テーブルの上にはワイン。ランバリーは服を脱ぎ、毛布をかぶつてうたた寝をしている。ピエールがその傍に坐っている。)

ランバリー Oh! Les femmes, les femmes! (うーん、女・・・女・・・)

語り手 ピエールはどうしても胸の内にあるものを話してしまいたくなる。「私の考えている女性への愛は、あなたとは少し違うんです」と、彼は切りだす。「私は生涯を賭けてたつた一人の女性を愛し、そして今でも愛している。しかし、彼女が私の伴侶になることは決してないだろう」と。

ランバリー (眠りながら。) Tiens... (フーン)

語り手 ピエールは続けて、私はこの女性を本当に小さい頃から知っていた。しかしその頃は、彼女のことを思う勇氣がなかった。彼女があまりに若く、また私は苗字もない庶子だったからだ。それから時が経ち、私は苗字を得た。すると今度もまた、彼女のことを思う勇氣が出なかった。私が彼女をあまりに愛し、彼女をこの世の何よりも高いものとして・・・従つて勿論、自分よりずっと高いものとして・・・崇めていたからだ。

話がここまで来た時、ピエールはランバリーの方を向き、「これがあなたには分りますか?」と訊く。

ランバリーは肩を竦め、自分に分らなくてもいい。とにかく先を話してくれ、という動作をする。

ランバリー (半分寝ながら。) L'amour platonique, les

nages... (プラトニック・ラヴか・・・雲だな、雲だ。)

語り手 酔っ払ったせいで心の底を打ち明けたい気持になつたのか、或は相手が自分の話の登場人物を誰一人知らないし、またこれから先も知ることはないという安心感からか、とにかくピエールの舌は解(ほど)ける。そして、口をモグモグさせ、官能的な目で遠くを見つめながら自分のことを洗いざらい話す。自分の結婚のこと、ナターシャが自分の最良の友人に恋したこと。そして裏切ったこと。自分のナターシャに対する一途な思いのこと。彼は最初は隠していた自分の社会的地位、そして自分の苗字までこの男に打ち明けたのだ。

(ランバリー、眠っている。)

語り手 ピエールは立上る。目をこする。そして、彫り物のある台尻のついたピストルをじつと見つめる。

ピエール まさか、もう手遅れということはないだろうな。いや、ナポレオンは八月十二日までには、モスクワには着かない筈だ。(ピストルを手に取る。) どうやって持って行く。街中を手でぶら下げて行く訳には行かない。いくら上衣のカフタンがブカブカでも、こんな大きなものを隠せっこない。帯にさすのも駄目、小脇に抱えるのもすぐ見つかってしまう。おまけに弾はさつき使ってしまった。弾をこめなきやいけな。が、その時間はない・・・まあいい、短刀にしよう。(短刀を手に取る。蝋燭を吹き消し、こっそりと退場。)

ランバリー(夢で寝る) L'Empereur, l'Empereur... (陛下・・・陛下・・・)

(暗転)

第十八場

(夜。百姓家。半分に分けられている。右半分は、伯爵夫人、ナターシャとソーニャ。三人とも夜着姿。寝るために着替えをしたところ。窓には火事の照り返しが映っている。)

語り手・・・アンドリエーイが負傷して、この逃避行の一行の中にいるという話を、ソーニャは何故か自分でも理解出来なかつたが、どうしてもナターシャには話さねばならないと感じ、それを実行に移したのだった。それを聞いて伯爵夫人がどんなに驚いたか、どんなにソーニャに対して怒ったことが。

ソーニャ ほら、御覧なさいナターシャ。あの燃え方。何て恐ろしいんでしよう。

ナターシャ 燃えているって?・・・何のこと?・・・ああ、モスクワ・・・

ソーニャ あなた、ちつとも見ていないじゃないの。

ナターシャ いいえ、見たわ。ちゃんと見えたわ。

伯爵夫人 ナターシャ お前、身体中震えているわ。寒いよ。さあ、早く寝て。

ナターシャ 寝る?・・・ああ、いいわ。私、寝る。すぐ寝るわ。

伯爵夫人 さ、ナターシャ、その羽織っているものを取って、私のベッドにいらつしやい。

ナターシャ いいえ、ママ。私、ここの床の上に寝るわ。(苛々と。)ママの方こそ早く寝て!

(三人、横になる。静かになる。どこかから、長くのばした呻き声が聞こえて来る。)

ナターシャ（起き上がり。）ソニーヤ、あなた、寝た？
ママ？・・・（用心深く扉の方にこつそりと進む。）

（暗転）

第十九場

（小屋の左手半分が現れる。（右手は消える。）夜。長椅子に侍僕が眠っている。ベッドには、譫言（うわごと）を言いながらアンドリエーイが横たわっている。その身体に屈み込むように語り手。）

アンドリエーイ ああ、これだ。これが人間だけが持てる
幸せだ。物質から完全に切り離された、物質を越えた幸せ・・・
ピーチ！

語り手 ピーチ！ ピーチ、ピーチ！ ピーチ！ チーチー、
ピーチ！ ピーチー。彼の顔の真中から空中に向って、奇妙
な尖（とが）った、塔のような建造物・・・細い針か、或は
薄い鮑膚（かんなくづ）のようなもので出来た高い高い塔・・・
アンドリエーイ この塔を倒してはいけない。平衡を保つ
て、崩れないように・・・

語り手 この空気のように脆（もろ）い建造物が、傾いて
倒れたりしないように・・・

アンドリエーイ 伸びる、伸びる、引き伸ばされて、どん
どん伸びて行く・・・

語り手 蠟燭の赤い光の輪、枕にぶつかってくる蠅、ゴキ
ブリ、そしてそのガサゴソという音・・・それから扉の傍に
ある白いもの・・・何かスフィンクスの彫像のような・・・
アンドリエーイ いや、しかしあれば、スフィンクスじゃ

ない。ひよっとすると、テーブルの上に置いてある僕のシャ
ツかもしれない。それから、あれが僕の足。あれが扉。しか
しそれにしても、どうしてみんな、引き伸ばされて行くんだ。
ずんずん、ずんずん遠くへ・・・ピーチ！

語り手 ピーチ！ ピーチ！ ピーチ！・・・

アンドリエーイ もういい。もう伸びるのは止（や）めて
くれ。頼む。止め！・・・そうだ、愛だ。でもいつものあの
愛じゃない。あの、何かのために愛するという、あの愛じゃ
ない。死に際になって初めて経験したな、この愛は。自分の
敵を見ても、そいつを愛することが出来る。その愛が・・・
神だけにある愛を、今初めて・・・ああ、僕は人生で、ど
れだけ沢山の人間を憎んだことか。その中でも、あれほど愛
し、そして同時にあれほど憎んだ人間は・・・あの人しかい
ない。

語り手 そして彼には初めて、自分の、彼女への愛の拒絶
がどんなに相手にむごいものだったか、彼女との断絶がいかに
残酷なものだったか分ったのだった。

アンドリエーイ ああ、もしもう一度、もう一度だけ、彼
女に会うことが出来たら・・・あの目を見て、もし言うこと
が出来たら・・・ピーチ！

（扉が開き、ナターシャ登場。アンドリエーイに近づき、膝
まづく。）

アンドリエーイ 君は・・・ナターシャ？ ああ、何て嬉
しい！

ナターシャ 許して！ 私を許して！

アンドリエーイ 愛している、僕は・・・君を。

ナターシャ 許して下さい・・・
アンドリエーイ 何を許せと？

ナターシャ 私がした・・・してしまつた・・・ことを・・・
アンドリエーイ 僕は今、以前よりずっと君を愛しているんだ！

(侍僕 目を醒す。恐怖の表情で見る。扉が開き、医者登場)

医者 何ですが、これは、どうか出て行って下さい、お嬢さん。

(暗転)

第二十場

(第十八場と同じ右半分の場。伯爵夫人、伯爵、ソーニヤ、心配そうに三人で囁き合っている。)

(医者、左半分の間から、急いで出て来る。)

(左半分の間から、侍僕、走って出て来て、右半分の間を通り抜け、退場。水を持って来て登場。それから、舞台裏からマリーヤの声がする。)

ソーニヤ (扉の方に走りよる。) ここです、ここです！

マリーヤ (旅装。登場。) 生きて・・・生きていますか、まだ兄は・・・

伯爵夫人 (囁き声で。マリーヤに。) *Mon enfant, je vous aime et vous connais depuis longtemps.* (まあ、あなた、存じあげていますわよ、あなたのことは。ずっと以前から。大好きなマリーヤ。)

伯爵 (マリーヤに。) これはうちの姪でしてな、公爵令嬢殿。この子のことは、きつと御存知ではないでしょう・・・

マリーヤ 生きて・・・生きていますか？ 兄は。

(ナターシャ、左手の間から登場。泣きながらマリーヤを抱擁する。)

マリーヤ どんな具合なんですか？ 兄は。

ナターシャ ああ、マリーヤ。あの方、良い人過ぎるのですわ。もう駄目。生き長らえるのは難しいですわ！

(侍僕、突然敷居の所に登場。十字を切る。泣く。)

伯爵 どうした。

マリーヤ どうしました。

侍僕 息絶えておしまいに・・・

(マリーヤ、伯爵、伯爵夫人、ソーニヤ、左手の場に突進する。)

ナターシャ どこに行っておしまいに・・・あの方は今どこに・・・

(暗転)

第二十一場

(モスクワ。火事。ポーヴァルスカヤ街。蒲団、サモワール、聖像、衣装箱、等々。)

マリーヤ・ニカライエヴナ 皆さん、助けて。情け深い、信心深い皆さん、お願いです。お助け下さい。誰か！ 私の末の娘が取り残されたんです。あの燃えている家の中に・・・制服を着た男。もうよすんだ、お前。きつと姉さんが連れ出してくれている。でなきや、ちゃんとここにいる筈じゃないか。

マリーヤ・ニカライエヴナ 意気地無し！ 卑怯者！

あんたには心というものがいいのか！ 自分の子供を可哀相とは思わないのか！ あんたでない人なら、誰だつてあの子を火の中から助けたに決まつてる！ あんたは意気地無しよ。人間じゃない、父親でもないわ！

(制服を着た男、走つて退場。ピエール、走つて登場。)

マリーヤ・ニカライエヴナ 皆さん、御親切な皆さん！家が燃えてきたんです。火がこつちに振りかかつて……それで着のみ着のまま……ほら、出せたものと言つたら、聖像と、私の嫁入りの時のベッド、そして二人の子供は連れ出した……でも、カーチャがいないの！

ピエール それで、その子供はどこに。どこに置いて来たんです。

マリーヤ・ニカライエヴナ まあ、旦那様！ 有難うございます。どうかお助けを。この心の重荷をどうか楽にさせて……

ピエール よし、行つて見て来る。(燃えている家の門の中に飛び込む。)

(マリーヤ・ニカライエヴナ、走つて退場。)

ピエール (舞台裏で。) Un enfant dans cette maison. N'avez-vous pas vu enfant? (この家の子供が……見なかったか？ 子供を。)

フランス兵の声(舞台裏で。) Un enfant? J'ai entendu... Par ici... par ici... (子供？ 声がしたぞ、さつき。……こつちの方だ。……こつちだ……)

(東洋風の顔をした老人とアルメニアの美人、登場。二人疲れて、衣装箱に坐る。ピエール、両手に子供を抱きかかえて

走つて登場。フランスの掠奪兵二人……背の低い掠奪兵と外套を着た掠奪兵……登場。それから、あばたのある老婆、子供(カーチャ)を連れて、走つて登場。背の低い掠奪兵、東洋風の老人に、老人の履いている靴を指さし、「出せ」と手まねする。老人、靴を脱ぎ始める。)

あばたのある老婆(ピエールに。)旦那様、誰かをお捜しですね。それで、誰の子供なんです？ これは。

ピエール 連れて行つて……ほら、あつちに行つたあの人に……連れて行つて……(訳註 掠奪兵が気になつて、上の空で言つ。)

(外套を着た掠奪兵、アルメニアの美人の首から首飾りをもぎ取るうとする。アルメニアの美人、金切り声を上げる。)

ピエール(あばたのある老婆に、子供を預けて。) Laissez cette femme! (その婦人を放すんだ！)(外套を着た掠奪兵に3 掴みかかり、地面に投げつける。)

背の低い掠奪兵(短刀を抜いて。) Voyons, pas de bêtises! (やるか。小癪(こじゃく)な！)

(ピエール、背の低い掠奪兵に飛びかかり、足で蹴る。殴り始める。あばたのある老婆、大声を上げる。)

(舞台裏で、フランスの見張りの騎兵隊の蹄が近づくのが聞こえる。その後馬を降りる音。騎兵隊員、走つて登場。隊員達、ピエールを殴り倒し、持ち物を捜す。)

隊員(ピエールのポケットから短刀を取出し。) = a un poignard, lieutenant. (隊長、こつち、短刀を持ってました。)

隊長 Ah, une arme! C'est bon, vous direz tout cela au conseil de guerre. Parlez-vous français, vous? Faites venir l'interprète! (あ

あ、武器か。よし、このことを軍法会議で証言するんだ。おい、お前、フランス語は喋れるか。通訳を呼べ。）

(隊員達、小さな男を連れて来る。)

小さい男 (ピエールを見つ。) Il n'a pas l'air d'un homme du peuple. (この男は平民ではなれなそうじゃ。)

隊長 Oh, oh, ça m'a bien dair d'un des incendiaires.

Demandez-lui ce qu'il est. (お前、私には何だか放火犯の一人に見えるな。何者が訊いてみる。)

小さい男 誰だ、お前は。上官には答える義務があるぞ。

ピエール Je ne vous dirai pas qui je suis. Je suis votre prisonnier. Emmenez-moi. (おのりなどするものか。私はそちらの捕虜だ。連れて行け。)

隊長 (顔を曇めし。) Ah, ah, marchons! (ん。じゃ、歩け。)

(隊長達ピエールを引つ立てる。)

あばたのある老婆 この人達はあんたさんをどこへ……この子を……この子を私はどう連れて行けば……

隊長 Qu'est-ce qu'elle veut, cette femme? (何だ、この女は何と言つてんぞ。)

ピエール Ce qu'elle dit? Elle m'apporte ma fille, que je viens de sauver des flammes! Adieu! (何と云つてゐるかつ? 私は自分の娘を火事から救い出した。その娘を連れて来てくれたんだ。ああ、やらは……)

(暗転)

語り手 この目的のない嘘が何故迸(ほとばし)り出たか、自分でも分らないままピエールは、きつぱりとした重々しい

足取りでフランス兵達に引つ立てられて行く。

この見回り騎兵隊は、モスクワの主だった通りにデュロネールの命により、掠奪の抑止と放火犯を逮捕する目的で派遣された見回り隊の一つであった。フランス軍の一般的な考えでは、火事は全て、放火によって起ったものとされていたのである。

第二十二場

語り手 次の日ピエールは、捕えられたロシア人の被疑者達と一緒に、放火犯の疑いで裁判にかけられることを知った。

裁判が行われる場所は、ピエールが以前よく訪問した屋敷であった。その硝子ばりの回廊、控えの間、玄関を通つてピエールは、裁判の部屋に引き出される。

(シチエルバートフ家の部屋が現れる。壊されており、家具類が剥がされている。ダヴーが机についている。ピエール、その前に立っている。窓から煙が見える。フランス軍の軍楽隊の演奏する音楽が聞こえる。)

ダヴー Qui êtes-vous? (お前は誰だ。)

語り手 ピエールは黙っている。一言も話す力がなかったのだ。ダヴーはピエールにとつてただの将官ではなかった。

ピエールは、この男がフランス軍の中でも残忍で知られている人物であることを知っていた。ピエールは返答が遅れる一秒一秒に、彼の命がかかっていることを感じた。しかし、何と答えてよいか分らなかつた。自分の地位と名前を明かすのは危険でもあり、また恥づかしいことでもあつた。ダヴーが頭を上げる。眼鏡を額まで持ち上げる。そして両眼を細める。

「私はこの男を知っている」と重々しく、冷たくダヴーは言う。明らかにピエールに恐怖を抱かせるよう良く計算された物言いだ。

「お前は誰だ」と訊かれた時背中に走った冷たいものが、今度はぐっと上に上り、頭をキリキリと万力を使ったように締めめる。

ピエール Mon general, vous ne pouvez pas me connaître, je ne vous ai jamais vu... (閣下は、私の顔を御存知の筈がありません。一度もお会いしたことがないのでから・・・)

ダヴー C'est un espion russe. (こいつはロシアのスパイだ。)

お前はロシアのスパイだ。

ピエール Non, Monseigneur! Non, Monseigneur, vous n'avez pas pu me connaître. Je suis un officier militaire et je n'ai pas quitté Moscou. (いえ、公爵閣下、閣下が私を御存知の筈がありません。私は義勇兵を指揮する士官で、モスクワを離れたことがないのでから。)

ダヴー Votre nom? (名前は。)

ピエール Besouhof. (ベズーホフです。)

ダヴー Qu'est-ce qui me prouvera que vous ne mentez pas? (それを証明するものが何かあるのか。)

ピエール (哀願する声) Monseigneur! (閣下。)

語り手 ダヴーは目を上げ、じっとピエールを見つめる。二人は数秒見つめ合う。じっと見つめ合う二人の視線がピエールを救った。この視線により、敵対する二人の間に、戦争、裁判という条件を越えた人間の関係が成立したからである。今やダヴーは、目の前にいるこの人物に、「人間」を認めた。

彼は一瞬、物思いに沈む。

ダヴー Comment me prouverez-vous la vérité de ce que vous me dites? (君が今言ったことを、どうやって証明するつもりなんだね?)

ピエール 思い出しました! 思い出しました!

語り手 ピエールはランバリーの苗字を思い出し、彼の所属の部隊、そして彼と話をした家の、街の名前を言った。

ダヴー (疑いをもって。) Vous n'êtes pas ce que vous dites. (君は自分が言っている人物とは違う。)

ピエール Monseigneur! (閣下。)

(副官登場。ダヴーに何か耳打ちする。)

語り手 ダヴーは上衣の釦をかけ始める。どうやらピエールのことは全く忘れてしまったらしい。副官が「捕虜をどうしますか?」と訊くと、ダヴーは顔を曇め、ピエールの方を顎でしゃくって、「連れて行け」と合図する。しかし、ピエールにはその合図が何を意味するか分らない。元の部屋に戻されるのか、或は処刑の場所に引っ立てられるのか・・・

(暗転)

第二十三場

(中庭。囚人の列あり。青い軍服に、胸の長い軍帽のフランス兵達が、頭の毛を剃った二人の囚人を引っ立てて登場。一人の囚人は召使風の四十五歳の男。非常な美男子。もう一人は黄色い顔の工具。二人を列に並ばせる。列の最後にピエールを立たせる。太鼓の音が鳴り響く。)

語り手 この一連の行動が行われている最中、ピエールの

頭には一つの考えがこびりついて離れなかった。結局、一体誰が最終的に自分に死刑を宣告したのか。このことである。ダヴーではありえない。彼はあんなに自分を人間的な目で見たではないか。もう一分間の猶予さえあれば、ダヴーは自分達が馬鹿なことをしていると気づいた筈なのだ。その一分を邪魔したのは、入って来た副官だ。そしてこの副官は、何ら自分に敵意を持っている者ではない。しかしあの瞬間、この副官が部屋に入らないですませることなど、到底出来なかったであろう。

すると一体誰がこの自分、ピエール、を殺すことにしたのか。その身体（しんたい）と共に全ての記憶、欲求、希望、思考、を殺すことに……。そしてピエールは感じた。それは誰でもないと。物の弾み、事の成行きが結局、自分、ピエール、を殺すのだ、と。

（二人の囚人が目隠しをされ、連れ去られる。太鼓の音。一斉射撃の音。召使い風の男と工員が目隠しをされる。連れ去られる。太鼓の音。一斉射撃の音。舞台裏で「Tiraieurs au gate-vingt-sixieme, en avant!（第八十六連隊射撃兵、前進！）」フランスの兵隊、寝巻を着た五番目の工員を引き立てようとす。工員、飛び退いてピエールにしがみつく。ピエール、彼から離れる。工員、目隠しをされる。工員、頭の後ろの結び目をしっかりと結ぶ。工員、連れ去られる。）

語り手 ピエールは息をするのもやつとで辺りを見回す。「一体何が起っているのです？」と訊ねるかのよう。しかしこの質問は、そこにいる全員の顔にある質問であった。フランス兵の顔にも、士官の顔にも。そこに現れていたものは、

ピエールの心にあった同じ驚愕と畏怖と葛藤であった。

ピエール 誰がこんなことをやっているんです、結局……
一体誰が！

（太鼓の音。一斉射撃の音。間。）

ダヴーの副官（ピエールに。） Ca leur apprendra a incendier.
（放火のむくいだ。思い知つたらう。）

語り手 ピエールは自分が助かっていたことを知らなかった。ここへ連れて来られたのは、死刑に立ちあわせるためだけだったのだ。

（兵士達、ピエールを引き立てて、登場した所とは別の場所から退場。）

語り手 死刑立ちあいの後ピエールは、他の被疑者達とは切り離される。そして夕刻前に見張りの下士官から、自分は許され、今度はロシア軍の通常の捕虜として仮小屋に収容されるのだ、と知らされる。
42

第二十四場

（夜。小屋。聖像（複数）。その傍に灯明 服を脱いでクトゥーゾフ、ベッドに横たわっている。）

語り手 腕の良い獵師と同様、彼も獲物が傷ついていることを知っていた。全ロシアの力すべてがかかった手傷を負っていることを。しかし、その傷が致命傷かどうかは分らなかった。その点は未だ明らかにされていない間であった。

クトゥーゾフ（半分眠りながら呟く。） 敵は致命傷を負っている……誰もかれも、その手負いの獲物を見ようとして奔走している。何故？ 何故見たがるのか。近づいて、手負

いの相手と戦って・・・それが面白いと思っっているのか。全く子供もいとこるだ・・・

(ノックの音)

クトゥーゾフ はい。誰だ？ 入りたまえ。どうぞ入って。

(トリー、蝋燭を持って登場)

クトゥーゾフ 新しい事実が分ったのか。

(トリー、興奮して手紙を渡す)

クトゥーゾフ (目を通して) 誰が持って来た。

トリー 閣下、そこに書かれていることは疑う余地はありません。

クトゥーゾフ さ、早く、早くその男をここへ。

(トリー、バルハヴィーチノフを導き入れる)

クトゥーゾフ さあ、こちらに。もつと近くに。何という嬉しい便りを君は持って来てくれたんだ！ ナポレオンがモスクワから去ったと？ 本当にそうなのか。あ？ 話してくれ。待ち焦がれていたのだ。これ以上私を苦しめないでくれ。

バルハヴィーチノフ 捕虜達もコサックも、斥候も、一緒に同じことを言っております。

クトゥーゾフ (聖像の前に行き) おお、神よ、我らが祈りを聞きたまうたのか・・・ロシアは救われた・・・神よ、私は心から感謝致します。

(暗転)

語り手 この知らせが来た後のクトゥーゾフの行動はただ一つのことには絞られた。瀕死の敵との無益な衝突を避けるため、あらゆる手立て・・・権力、知力・・・を用いたのである。そして、必要とあれば、辞を低くして懇願さえしたのだ。

(第三幕 終)

第四幕 第二十五場

(昼。雨。掘立小屋の中。ヂエニーソフ、エサウールとヴェンソン・ボスの三人。ヴェンソン・ボスはフランス軍の鼓手の少年。捕虜になって恐怖で背中を丸めている) (訳註
ヴェンソンはフランス語では Vincent (ヴァンサン))

エサウール 誰が来ます・・・将校のようです。

ペーチャ (登場) 將軍からの連絡です。申し訳ありません。ずぶ濡れになっています。(包みを渡す)

(ヂエニーソフ、読む)

ペーチャ 誰もみな、二言目には危険だ、危険だ、とそればかり・・・ああ、そうです、こちらにはピストルが二丁あります。

ヂエニーソフ ラストーフ！・・・ペーチャ！ ペーチャ じゃないか！ 何故最初に自分の名前を言わないんだ！ (エサウールに) おい、ミハイール・フェオクリートウィッチ！

また連絡を寄越しやがったぞ。あのドイツ野郎の將軍が。(ペーチャを指さして) この男はそいつの下にいるんだ。

(心配そうに) 今俺達で敵をやっつけてしまわんと、連中に油揚げ(あぶらげ)をさらわれちまうぞ・・・

エサウール ウム。

ペーチャ 隊長殿、私にはどのような命令をお下しになりますか。

ヂエニーソフ 命令？・・・なあペーチャ、お前、明日ま

でここにいってもいいって言われたのか？

ペーチャ エー……その……留まってもよいでありますか。

チェニーソフ うん。しかし、將軍の、君に対する命令はどうだったんだ？

ペーチャ いえ、それは別に何も……なかつた筈です。留まってもいいですね？

チェニーソフ よし、分つた。

ペーチャ でも僕を一番大事な任務につかせてくれなきや厭ですよ、ヴァスィーリイ・フョードロヴィッチ！ お願いです！

チェニーソフ 一番大事？（訳註 ニヤリと笑つ。）……いいか、言うことには従つてくれなきや困るぞ。自分勝手にどこかへ突進、は駄目だ。いいな？

ペーチャ（羊肉を切るうとして）エサウールに。（ああ、小刀がいるんでしょう？ さあ、これを使って下さい。いいんです。どつぞ、差し上げます。僕はいっぱいありますから。従軍商人に、真面目な人が来て、その人から買ったんですよ。真面目ですよ、大切なのは……ああ、あれは誰ですか？（訳註 残れることになって嬉しくて一人ではしゃいでいる。と同時にそつなっている自分を恥ぢてもいる。）

エサウール フランス軍の鼓手……捕虜だ。名前はヴェンソン・ボス。

ペーチャ 何か食べるものをやっていますか。

チェニーソフ（上の空で。）ああ、いい。

ペーチャ（感激して。）ああ、ヴァスィーリイ・フョード

ロヴィッチ！ あなたにキスさせて下さい！（チェニーソフにキス。）ボツス！ ウアンサン！

（ボス、ペーチャに近づく。）

ペーチャ Voulez-vous manger?（君、腹減つてない？）
N'ayez pas peur, on vous fera pas de mal.（怖がらなくていいんだ。何もしやしないよ。）（ポケットから食べ物を出し、与える。）

ボス Merci, monsieur.（有難うございます。）（ペーチャから離れ、ガツガツと食べる。）

ドーロホフ（登場。ボスを指さして。）こいつは長いことここにいるのか。

チェニーソフ 今日の捕虜だ。何も知つちやいなかった。

ドーロホフ フン。それで、こいつ以外の捕虜はどうしたんだ。

チェニーソフ どうしたつて？ 決つてるだろう。本部へ送つたさ。ちゃんと受領書つきでな。あいつらのうちのただの一兵卒にだつて、こつちの良心が咎めるようなことはやつちやいないぞ、この俺は。

ドーロホフ（ペーチャを指しながら。）そんな台詞は、この十六歳の伯爵の坊やが言うなら話は分るさ。だがな、大きな大人のお前さんが言つのは少し恥づかしいんじゃないのか。

ペーチャ 僕は何も言つてません。僕はただ……

ドーロホフ（ボスを指さして、チェニーソフに。）いいか、じゃ、何故この子だけ一人ここに引き留めておいたんだ。可哀相だと思つたからじゃないか。受領書つきでなんて言つてゐるが、その実態はお前さんが一番よく知っている。送り出さ

れたって、捕虜は大抵途中で飢え死にするか、引率の兵隊に殴り殺されるかどっちかだ。どうせそうなら、捕虜にするだけ無駄じゃないか。

チェニーソフ 殺される？　しかしとにかくそいつは、この俺の手でやる訳じゃない……

(突然、荷車の隊列の動く音が聞こえて来る。全員黙る。)

チホーン(突然登場) フランス兵です！　山にさしかかったところですよ。敵軍ですよ！

チェニーソフ やるか？

ペーチャ やりませう。やりませう！

エサウール あの場所なら袋の鼠だ。

チェニーソフ 急襲だ！　歩兵は沼地を直接進軍する……

(ドーロホフに。) コサック隊は向こう側に廻ってくれ。

(ドーロホフ、扉に突進して退場。)

エサウール(ドーロホフに。後ろから。) 低地は駄目ですよ。泥沼ですよ。馬がぬかるみに嵌(は)まります。左手を迂回して下さい。(言いながら自分も走って退場。)

チェニーソフ(チホーンに。) 逃げ。急襲の合図を頼む！

(チホーン、走って退場。)

ペーチャ ヴァスィーリイ・フョードロヴィッチ、何か僕にやらせて下さい。お願いです！

チェニーソフ 俺の言うことを聞くんぞ。いいか、どんなことがあっても動くな。この小屋にじっとしているんだ。

(舞台裏で銃声。)

チェニーソフ 合図だ！(走って退場。)

(舞台裏でコサック隊の叫び声。撃ち合う音。どよめき。近

くなる。ボス、恐ろしそうにうつ伏せになる。舞台裏の声「迂回だ。迂回しろ！　歩兵はそこで待ち伏せだ！」)

ペーチャ 歩兵は待ち伏せ？……よし、……突撃！

(小屋から走り出て、どこかへ突進する。しかしすぐに倒れる音。)

ドーロホフ(登場) 終りだ。

チェニーソフ 死んだのか。

ドーロホフ (頷いて。) 終りだ。

(暗転)

第二十六場

(ラストーフ家の田舎で。)

伯爵夫人 ソーニヤ……ソーニヤ……分つて、この私達の不幸を……モスクワにあった財産を全部なくしてしまつたのよ……これを救うただ一つの手立て……それは二

カライがバルコンスキイのお嬢さんと結婚することなの……

ねえソーニヤ、お前、ニカライとの約束をなかつたものにして……ねえソーニヤ……そう、あの子に手紙を書いて。いいわね？

(ソーニヤ、泣き始める。)

伯爵夫人 ソーニヤ、何ですか！　あの子に書けないと言

うんですか！

ソーニヤ いいえ、いいえ、そんなこと。私はただ悲しいのですわ。私がこの家の悲しみの種になっているなんて……

このお家に私はどんなにお世話になったことでしょう。その私が悲しみの種に……私、何でも致しますわ。ニコラスに

45

手紙を書きます。ええ、「もうあなたは自由なのよ」って……
伯爵夫人 ああソーニヤ、ソーニエチカ！（ソーニヤを抱きしめる。）

ドウニヤーシャ（噁り泣きながら。）下の坊っちゃんに御不幸が……お手紙が……

伯爵（泣きながら登場。）ペーチャ……ペー……ペーチャ……

（マリーヤ、走って登場。伯爵夫人と抱擁する。）

伯爵夫人 ナターシャを、ナターシャを呼んで。こんなこと嘘！ 嘘の手紙よ！ ナターシャを！ みんなあつちへ行つて！ 死んだなんて……殺されたなんて、嘘！……嘘よ！

伯爵 お前……お前……

ナターシャ（登場して。）ああ、お母様！……ママ……

伯爵夫人 ああナターシャ、お前、よく来てくれたね。何て綺麗になって……大人になって……

ナターシャ ママ、しっかりして。目を逸らせちゃ駄目。ね、ママ！

伯爵夫人 ナターシャ！ あの子はもういないの！（退場）
（ソーニヤを残して全員伯爵夫人の後を追って退場。）

ソーニヤ（一人残って。）私は犠牲になるわ。私、犠牲になるのは慣れている！ でも、今までは自分を犠牲にする度にニコラスに相応しい自分になってきた。でも今度は、自分を犠牲にしてその御褒美に戴いていたものを、そっくりそのままお返ししなければいけない。私の生きる目的を、そっくりそのまま！ お母様、私、お母様を恨むわ。私、悔しい！ お母様は私を育ててくれたけれど、それはこんな風に私を

苦しめるためだったのね！ でも仕方がない。私、犠牲になる！

（暗転）

第二十七場

語り手 ピエールが属していた捕虜の一団は、フランス軍の一隊に引き立てられ、モスクワからの逃避行を続けていた。

そしてこの隊は、モスクワからここまで逃げて来る間、司令部から何の命令も受けていなかった。従って、十月二十二日のこの隊の有様は、モスクワを出発した時のあの整然とした状態とはおよそかけ離れたものであった。また、捕虜の数も、出発時の三百三十人から、現在では百人を切っていたのだ。

護送兵にとつて、捕虜は邪魔な存在だった。捕虜と一緒に運ばれている、馬がいなくなつて残された鞍だの、ジュノー⁴⁶

元帥の分捕品の荷物だのよりも、ずっとお荷物だった。ジュノー元帥の銀の匙も、馬のいなくなった鞍も、いつかは何らかの役に立つ可能性はあった。しかし、凍えて腹の減っているフランス兵達が、同じく凍えて腹の減っているロシア兵の捕虜を見張り、護送することに、何の意味があるというのか。

どうせ連中は、道中で寒さに耐えきれず、取り残され、命令が出、銃殺されるのだ。フランス兵達にはこついうものを護送することが不可解なだけでなく、不愉快極まることだった。

また、護送兵も捕虜と同様、悲しむべき状況にあり、出発當時示していたような、捕虜に対する憐れみの気持などを起すものなら、自分の立場をいよいよ悪くする可能性があった。従って憐愍の情が表面に出ることを怖れ、逆に捕虜に対して

厳しく暗い態度で接するのだった。

(夜。休憩時。焚き火。焚き火の傍にピエールとプラトン・カラターイエフが横になつてゐる。ピエールは襦袢(ぼろ)を纏つてゐる。裸足。カラターイエフは、軍外套を着てゐる。)
カラターイエフ(譎言を言つ。) なあ、兄弟・・・いいか、
それでな、兄弟・・・

ピエール カラターイエフ! おい、カラターイエフ・・・
どうなんだ? それで・・・身体は。

カラターイエフ 身体なんか! 病氣のことをぐちつたりすれば、神様が死を与えて下さらなくなる。(譎言。) それでなあ、兄弟。その男は十年・・・いや、それ以上の刑をくらつたのさ。それでシベリアに流されてな・・・

(ピエール、片手を振つて、カラターイエフから顔を背ける。)
カラターイエフ そいつは何も悪いことはしぢやない。

まつとつなことをまつとつにやつて来ていたんだ。だから神様には、ただ死を与えて下さいと祈つていた。分るよな?・・・
それでな、兄弟。お役所の方で、この年寄りを捜し始めたのさ。無実の罪で流刑され、酷い苦しみを受けてゐるんだから。皇帝からお役所に手紙が行つたのさ! でもその年寄りには、もう神様からお許しを得ていたんだ・・・死んでいたのさ! な、お若いの。分るな?(静かに呻き始める。)

(フランスの護送兵が近づき、カラターイエフを見る。銃の台尻で身体を押す。カラターイエフ、蹠(よる)めきながら立上り、犬の鎖を取る。護送兵、カラターイエフを引き立てて退場。暫くして遠くで銃声。犬が遠吠えを始める。)

ピエール 馬鹿な犬だ。何のために吠えるんだ。(横にな

り、まどろむ。) 水滴の真中に神様がいて、水滴一つ一つはみんな大きくなるうとしてゐる。その表面に、神様の姿を出るだけ大きく写そうとして、水滴は自分で大きくなつたり、他の水滴と合体したり、縮んだり、表面に浮んで来て、消えてしまつたり、底に潜つたり、また表面に浮き上つたりする。

カラターイエフもこれと同じだ。表面に浮き上つて消えて行つたのだ。 Vous avez compris, mon enfant? (なあ、生徒諸君、分つたかな?) (訳註 この部分は、ピエールが学生時代に聞いた先生の言葉を思い出してゐる。) (譎言を言つ。) キーエフにある僕の家のバルコニーに、ポーランドの美人がやつて来たつて。・・・水浴び・・・揺れる水滴・・・僕は水の中に沈む・・・頭の上で水が合わさり、閉じる。(眠り始める。)
(捕虜のロシア兵、焚き火に忍び寄り。辺りをこそそこそと見直し、馬の肉を炙(あぶ)り始める。)

フランスの護送兵(ロシア兵から肉を奪い取り。) Vous avez compris, sacre nom! (分つたか、この野郎!) Calui est bien egal! (いいつめ、どうなつたつて知るものか。) Brigandi (泥棒め!) Va! (あっちへ行け。)

(遠くで馬の蹄の音。銃声。ピュツという弾の音。「コサックだ」という叫び声。)

フランスの護送兵(肉を刺してある串を捨て。) Les cosaque! (コサック兵だ!)

捕虜のロシア兵 コサックだ。コサックだ。ピョートル・キリールイッチ! コサックですよ。(両手を擦り合わせて)
有難い。助かつた! ああ、兄弟!

(ピエール、両手を拵げ上に上げ、泣く。)

(暗転)

第二十八場

(モスクワのバルコンスキー家の邸。第二場の部屋と同じ。破壊の痕跡。夜。蝋燭。喪服姿のナターシャ、暗い隅に坐っている。登場したピエールに喪服を着たマリーヤが出迎える。)

マリーヤ まあ、お会い出来て何て嬉しいことでしょう。

捕虜の身でいらしたのを、ロシア軍が来て、自由の身におなりになったという噂を聞きまして、どんなに喜びましたとか。この長い間、伝わってくる噂はみんな悲しいものばかり。これが唯一つ明るい話題でしたわ。

ピエール ええ、本当に暗いことばかりで……

マリーヤ まあ、お分りになりませんか？(ナターシャを指して。) ナターシャですよ。

ピエール まさか……(訳註 やつとそれと気づく。)

マリーヤ 暫く私の家に逗留して下さいます。お医者さまにかかっていらして。御家族の方みんなにきつく言われたのですよ、ここにいくちゃいけません、て。

ピエール ああ、ああ、なるほど、なるほど……で、兄君のアンドリエーイ……彼は死ぬ前に、気分が和(やわ)らいだのですね？ 落ち着いたのでですね？ 生前の彼は、全精神を傾けて、完全に善なる人間になることを求めています。ですから、死など怖れはしなかった筈です。そうですね。和らぎましたか。最後にあなた方お二人に会えて、彼は幸せでしたよ。

ナターシャ ええ、それは本当に。(立上る。興奮して話

す。) 私達家族がモスクワを発った時、私、何も知らなかったのです。突然ソーニヤが私に、あの方が私達と一緒に教えてくれました。私はどうしてもお会いしなければ……どうしてもあの方の傍にいたいと思つたのです。(黙る。)

マリーヤ そうそう、モスクワに留まるうとご決心なされた時は、まだ奥様が亡くなられた事を御存知なかったのですかね？

ピエール ええ、私達は決して模範的な夫婦ではありませんでした。でも妻の死は、私に大きな衝撃を与えました。人間同士が喧嘩をする時、悪いのは決して片方だけじゃありません。いつだって両方が悪いのです。私はあれのことを酷く可哀相に思いました。

マリーヤ するとまた、お一人に……結婚出来るお立場におなりになったのですわね。(間。)

そうそう、ナポレオンにお会いになったって、皆そうお噂申し上げておりますけど？

ピエール いいえ、そんなことは一度も。どうも捕虜になることはナポレオンの客になること、とてもみんな思っているのでしょうか。私はナポレオンを見たこともありません。いや、それどころか、捕虜になっている間、その噂を聞いたこともありません。私はずっとずっと低い、下層の人間達と一緒に居たのです。

ナターシャ でも、モスクワにお残りになったのは、ナポレオンを殺すためだったと……それはそうなんでしょう？

ピエール ええ、そうです。(間。)

あの時モスクワは恐ろしい光景でした。火事になって家に子供は置き去りにされる……

・イヤリングは引き篋（むし）られる。・・・

マリーヤ まあ・・・

ピエール ええ。そこへ見張りの騎兵隊が現れて、掠奪など何もしていない人間まで誰もかれも引つ立てて行く。私も捕まったのです。

ナターシャ 話を飛ばしていらっしやいますわ。・・・きつと、きつと、何か善い事をなさって・・・（問）・・・立派な、善い事を・・・

ピエール（笑つ。）そう、みんな苦しかったことを、厭だつた事を話すものです。でも、今、この場で誰かが私に、「捕虜になる前のあなたに戻って、そのままのあなたでいたいのですか？ それとも、そこからまた、あの辛い生活を繰返しますか？」と訊かれれば、私は即座に、捕虜、馬の肉の生活を再びする、と答えます。生きることに、そこに幸せがあるのです。私達の未来、そこには沢山のものがあります。（ナターシャに。）本当にそうなんですからね。では、私はこれで、もう寝る時間です。（立上る。）

ナターシャ ねえ、マリーヤ。この方、まるでお風呂から今上つたばかりの人のよう。深瀬として、つやつやしていて、そして清潔なの。

マリーヤ ええ、素晴らしいわ。私、分る。だから兄はこの方ほど好きな人は他に誰もいなかったの。

ナターシャ（突然ピエールの髪をなでて。）刈り込んだ髪・・・（泣く。退場。）

ピエール いつからあの人を愛するようになったのか、私には分かりません。でも私は、ただあの人だけを、生涯愛し続

けてきました。そして今でもあの人なしの私の人生は考えられないのです。あの人に、今結婚を申込みことはとても出来ません。しかし、ひよつとして、申込みをして受け入れられる可能性があるのに、私がその可能性を自分で逃がしてしまつたかもしれない・・・そう考えると、とても恐ろしいのです。マリーヤ、どうか私の力になつて。私はどうしたらよいのでしょうか。私は希望を持つことが出来るとお考えですか？ どうなのでしょうか。

マリーヤ 希望をお持ちになれますわ。暫くペテルブルグにいらつしやることですね。私、手紙を差し上げますわ。

ピエール ああ、マリーヤ！
マリーヤ ナターシャ！ この方、ペテルブルグへいらつしやるのよ！

ナターシャ（登場して。）さようなら、伯爵。私、お帰りな心からお待ち致します。（突然ピエールを抱擁し、接吻する。）

ピエール（喜びに喘（あえ）いで。）ああ、こんなに嬉しいことが・・・いや、ありえない。決してある訳がない！
（暗転）

第二十九場

（バルコンスキイ家の同じ部屋。日中。）

マリーヤ（一人。）私の訪問をあんなに冷たくあしらうなんて！ ラストーフ家に行くのは気が進まなかった。私は正しかったわ。私、他のことはちつとも期待していなかった。

あの人のことなんか、気にもかけていなかった。ただあの人

のお母さまに会いたかったです。いつだって親切にして戴いた。それにいろいろお世話になって……だから行ったのに……（泣く。）

召使 ニカライ・イリイッチ・ラストーフ伯爵様です。

マリーヤ（涙を拭いて。）参りますと……いいえ、こちらにお呼びして。

（召使退場。）

マリーヤ 私が訪ねて行つたお返しだわ……ただの。

（ラストーフ登場。文官の服装。）

マリーヤ どうぞお坐り下さい、伯爵。（間。）お母様はお元気でいらつしやいませうか。

ラストーフ 有難うございます。

マリーヤ 文官の服装でいらつしやるのですね？ 伯爵。

ラストーフ はい。文官の仕事は私には全く向いていないのです。しかし、父の死以来、母は私を人生の最後の頼りと思つてゐるようで、私が軍隊につくことは不可能なのです。大好きな軍服を脱ぎ捨て、モスクワで文官の仕事につかねばならなくなりました。（間。）ではこれで失礼致します、公爵令嬢。

マリーヤ（訳註 悲しみで、他のことを考えていて、相手の立上つたことに気がつかないでいる。）ああ、失礼致しました。もうお帰りですか？ 伯爵。では、さようなら。

ラストーフ ええ、そうです、公爵令嬢。あれはついこの間のような気が致します……私達が初めて会つたあの時のことは。しかし、どれだけ長い時があれから経つたことでしょうか。あの時は私達二人とも、不幸のどん底にあるような気が

していました。でも、もしあの時に戻ることが出来るならば、私はどんなに大切なものでも抛（なげう）つてしよう……しかし、時を戻すことは出来ないのです。

マリーヤ ええ、ええ。でも、過去を惜しむことなど全く必要のないことはありませんの？ 今お聞きしました現在の生活でも、十分に自己を犠牲にしていまして、満足感をもつて御自分のことを省（かえり）みながらお暮しになつていらつしやる筈ですわ。

ラストーフ いいえ、そのお褒めの言葉は私には当て嵌まりません。それどころか、私は絶え間なく自分を叱責しているのです。しかし、止めましょう。楽しくもなく、面白くもない話題です。では、これで失礼します、公爵令嬢。（扉の方へ進む。それから突然立ち止まる。後ろを振り返る。）（訳註 次のマリーヤの最初の言葉「私……」が発せられ、それがあまりに切羽詰まつたものであったため。）

マリーヤ 私……私、このことは申し上げてもお許し戴けるのではないかと。私達、一時は随分近い気持ちになりましたわ……お宅の御家族とも。それで私……私がもう少し深くそちら様と係わつても失礼にはあたらないのではないかと……でも私、間違つていました。何故か私には分りません。でも、以前とはすつかりお変りになりましたわ。そして……

ラストーフ それが何故か……理由はたらくさんあります！ お気遣い、感謝します。時々は大変辛いのです。

マリーヤ ああ、そうなのだ。そうなんだわ！（囁き声で。）私、あなたの、陽気な、優しい、隠し立てのない目だけを愛

していたのではなかったのですわ。ただ外見の美しさだけを愛していたのではなかった。あなたの強い自己犠牲の心を見抜いて、それで……ええ、あなたは今、貧乏、そして私はお金を持っている……そう、そのためだったんだ。ただそれだけが理由だったんですわ！でも私、辛いのです。私……ええ、私、正直に申し上げます。お金のためにあなたは私から、以前の暖かい友情を奪っておしまいになるうとしていらつしやいます。それは悲しいことですわ。私は小さい頃から幸せの薄い人生を送って来ました。ですから、どんなものでも、失うことは私には大変辛いのです……どうぞお許し下さいこんなことを……さようなら。（泣きながら退場。）

ラストーフ（狼狽して。）お嬢様！許して下さい。お願いです。お嬢様！

（マリーヤ、戻って来る。）

ラストーフ（暫くの間沈黙。そして自分の帽子を床に叩きつける。）お許し下さい。私には軍隊式の殴り付ける悪い癖があつて。（絶望的に。）愛……愛していません、あなたを……私は。

（暗転）

第三十場 終曲

（十一月の夜。厳寒。丘の上。銃士隊の焚き火。フランスの国旗が林立している。）

クトゥーゾフ（お付きの將軍達と共に登場。）今何と言つた？

將軍 フランス軍の軍旗です、閣下。

クトゥーゾフ ああ、軍旗か……（少し離れている自軍の兵隊達に。）諸君、有難う。誠実で困難な務めをよく果してくれた。感謝する。我々の完全な勝利だ。ロシアは諸君のことを決して忘れはしないぞ。諸君の名誉は永久に残るのだ！（間。）下げる！それを下げるんだ！

（フランスの鷲の絵のある軍旗が下げられる。）

クトゥーゾフ もっと下げる！そう、それでよし。諸君！ウツラー！

（舞台裏で、何千という兵士の「ウツラー！」という声。）

クトゥーゾフ なあ、君達。辛かつたろうな。しかし、仕方なかった。もう少し辛抱してくれ。もう少しでお仕舞いだ。あのお客様方を追い返せば、その時には休める。君達の働きを皇帝陛下は決して忘れはしない。君達も辛いだろう。51

しかし君達とはかく自国にいるんだ。連中を見てみる。どんなに酷い有様か。乞食よりもずっと酷い状態じゃないか。連中が強かつた時には、我々は自分達のことを可哀相に思った。今は連中のことを可哀相に思つてやろう。連中だつて人間なんだ。な？君達。（間。）しかし、全く、何ていう話だ。一体どこのどいつが、連中をこんなところに連れて来たんだ。アホにも程がある……

（何千という兵士の吠え声。笑い声。クトゥーゾフ、お付きの將軍達と退場。フランスの軍旗もなくなる。銃士隊の兵士達、焚き火の傍に戻る。）

赤ら顔の男 おい、マケーイエフ、お前、どこへ消えた。狼に食われたのか。早く薪を持って来い！

(鼻の尖った男 少し起き上がる。しかしへなへなと崩れる。
若い男、薪を持って来る。焚き火を吹き、おこす。舞台裏で
みんなの合唱「ああ、ママ、露が冷たい。気持がいいぞ。俺
達は銃士隊の兵士だ……」)

踊りの好きな男(登場して歌いながら踊る。)
「ああ、ママ、露が冷たい……」

赤ら顔の男 おいおい、靴が火の中に飛んじやったじやないか。いくらダンスが好きだと言ってもな……

踊りの好きな男 まあいいさ、なあ兄弟！(脱げた方の足に布を巻く。)
「あいつら、こちとらの言う事が何にも分りはしない。訊いたんだ」「こいつは誰の王冠だ」ってな。すると訳の分らない言葉を吐きやがってな。たいした奴等だ！

若い男 戦闘があつたあのマジヤイスクの百姓達が多うた。あの辺りの十何箇村の百姓を全部かり出してな、二十日もかけて死体を運んだんだぞうだ。だけどまだ、全部は終つてない……狼は出るし、全く酷い話だ……

年寄りの男 あそこでの戦闘はすこかつた。あそこでの戦いが本物の戦闘って言えるやつだ……だが、戦いが終りや……
・そう、ただ厭なことしか残りやしない。

若い男 そうだ、なあおじさん、一昨日のことですよ。僕達は追撃した……いや、追撃なんてもんじゃやない、そんな暇なんかありません。あいつら、こつちが近づくとさつさと武器を捨てて、膝まづいてこちらを拜むようにして、「パルドーン、パルドーン」ですよ。でも、こんなのちつとも珍しくないです。僕の知りあいのプラトーフなんか、ポレオンの奴(訳註 ナポレオンのこと)を二度も掴まえたんで

す。だけど、呪(まじな)いの言葉をよく知らなくて、掴まえるには掴まえたけど、パツと小鳥に姿を変えて逃げてしまつたんです。二度とも。だから奴を殺すのはうまくいかなかつたんです。

曹長一 おい、キセリヨーフ、お前その顔で、よくそんな嘘がつけるな。

若い男 何が嘘です。本当の話ですよ、これは。
赤ら顔の男 俺だったらな、もしそいつを掴まえたら、地面に穴を掘つて埋めてやる。そしてヤマナラシの杭を打つて、出られないようにしてやる。人をいやと言つ程殺しやがって……

年寄りの男 まあとにかく、これで終だ。もうこんな所には二度と来ないぞ。
(雪の中をこちらに来る足音。)

踊りの好きな男 おい、熊が来るぞ。
(ランバリーとモレーリ、登場。ランバリー、フランスタ官の帽子。モレーリは女性用の外套にシヨール姿。ランバリー、焚き火の近くに来て倒れる。モレーリ、ランバリーに自分の口を指し示しながら何か言つ。銃士達、ランバリーに軍用外套を拵げて坐らせ、粥(かゆ)とウオツカを与える。ランバリー、呻いて食べようとしな。モレーリはガツガツと粥を食べ、ウオツカを飲む。自分の肩を指さし、ランバリーは士官であることを、そして暖めてやる必要があることを説明しようとする。)

曹長一 士官か……
曹長二 大佐に訊いてみよう。あつちへ連れて行つて暖め

てやった方がいい。

(曹長一、ランバリーに立上るよう手真似をする。ランバリー、立上る。ふらつく。)

赤ら顔の男 何だ、だらしねえな。

踊りの好きな男 おい、何を馬鹿なことを言うんだ、可哀相に。貴様、全くのドン百姓だな。

(若い男ともう一人の兵士、ランバリーを持ち上げ、運ぶ。)

ランバリー (二人の肩に両手をもたせかけて。)

Oh, mes braves, oh mes bon amis. Voilà des hommes! Oh, mes braves, mes bons amis. (ああ、親切な人達、有難う。親切な友人達。これでこそ人間だ。有難う。)

モレーリ (ガツガツと食い、飲む。酔っ払って歌う。)

Vive Henri quatre! Vive ce roi vaillant! (アンリー四世万歳！)

勇ましい王様 (万歳！)

踊りの好きな男 又・カ・又・カ・ナウキー……どうだ？ うまい真似だろう？ な？

モレーリ (踊りの好きな男を抱擁して。)

Vive Henri quatre!

Vive ce roi vaillant! Ce diable a quatre... (アンリー四世万歳。)

勇ましい王様万歳。たいしたものさ、この四世王は……)

踊りの好きな男 ヴィ・ヴァ・リ・カ・ヴィ・フ・セル・

ヴェル！ スイ・ディ・ヴリヤーカ！

(みんな笑う。)

赤ら顔の男 見ろ、うまいもんだぞ。はっはっは。

踊りの好きな男 おい、やるんだ、もう一回。さあ！

モレーリ Qui eut le triple talent

De boire, de battre

Et d'être un vert galant

(たいしたものさ、この王の才能)

飲んで、戦って、

そして粹(いき)なんだからな。)

踊りの好きな男 うまいもんだ。スラスラ言いやがる。さあ、ザレターイエフ、お前の番だ。

歌の好きな男 キュ……キュー・ユー・ユー……リエ

トリプターラ・デ・ブ・デ・バ・イ・デトウーラ・ヴォガー

ラ……

赤ら顔の男 うまいもんだ。フランス語だけ、こりゃ。オ

イ・ゴ・ゴ……

曹長一 こいつにまた粥を食わせてやれ。餓えてるんだ。

相当食わなきゃ恢復しないぞ。

(兵士達、モレーリに粥をやる。モレーリ、ガツガツと食う。)

年寄りの男 こいつだって人間よ。自分の生き方があらあ。

苦蓬(にがよもぎ)だって、自分の根で大きくなるんだから

な。

曹長一 ウー、何て寒いんだ。神様！ あの星を見る。恐

ろしいぐらい光ってるぞ。この調子じゃ、今年は冷え込むぞ。

・ (舞台裏から「ああ、ママ、露が冷たい。気持がいいぞ。俺

達は銃士隊の兵士だ……」と歌う声。)

(暗転)

語り手 そして、やがて寝静まり、シーンとなる。星達は

もう、誰も自分達を見る者がいないと知ってか、暗い空の中

で自由に遊びまわる。急に燃え上ったり、光を消したり、身

震いしたり。そして何か秘密の話があるのか、嬉しそうにお互いに忙しく囁きあっている。

(終)

一九三二年十一月二十五日 モスクワ

(訳註 これがブルガーコフが書き終った日にち。)

平成一五年(二〇〇三年)四月十日 訳了